家庭雜誌

第貳拾六號

幸福散史澁江保君著

生活指針 日々のおきて

全二冊洋裝 寸珍美本 一冊價十錢 各郵税四錢

人間の一生は一日にあり。一日を全ふするは一生を全ふするの基なり。然れども此一日を全ふすることは頗る難く。且つ紀律に由らざるべからず。本書は此一日を全ふするの方法紀律を述べたるものにして。全巻を(一)午前のおきて(二)午後のおきて(三)夜のおきて(四)平素心掛くべきおきて(五)家族の間のおきて(六)主從の間のおきて(七)朋友の間のおきて(八)喜ばしき時、悲しき時、腹立したる時、心配の時のおきて(九)金錢出納に關するおきて、の九編に分ち毎編皆先哲の言行に照して丁寧深切に説きたれば之を坐右の銘箴と稱し、生活の指針と稱するも過言にあらざらん

獨逸化學博士フーフェラント 獨逸醫學博士クレンケ 合著

坂田孫四郎君譯述

長命術

全一冊洋裝 寸珍美本 正價十錢 郵税四錢

鶴に千歳の齢あり龜に萬年の壽あり何ぞ人にして長命を保ち得ざるの理あらんや今本書は人間の幼時より老年に至る迄の身体精神の攝養法を學理と實驗より説明指示して綿密精緻遺漏する所なく一般の衛生書と其趣を異にし一度之を通讀せば豁然として長命の術を會得し無病健康に長く現世の生活を樂むを得べし

◉衛生美身術 全 正價十錢 郵税四錢

◉小兒養育法 全 正價十錢 郵税四錢

◉通俗簡易治療法 全 正價十錢 郵税四錢

◉通俗看病法 全 正價十五錢 郵税六錢

自在亭主人著

女房の氣轉

全一冊洋裝寸珍 正價十錢 郵税四錢

一名 和漢洋料理案内

一家の主婦たる者が毎日第一番に苦心するは日々總菜の料理方なり本書は著者が多年の實驗と幾多の料理通に就きて研究したる四季折々の各種の料理法野菜魚鳥其他各種の材料により各來客の上中下各等級に隨ひそれ〴〵の方法を平易の文章にて女子供にも極て分り易く編述したるものなれば世の女房達の坐右の實典なり

◉生活指針 日々のおきて 二冊 正價二十錢 郵税八錢

◉家事經濟書 全 正價十二錢 郵税四錢

◉家政の栞 全 正價二十錢 郵税六錢

◉家政整理法 全 正價十五錢 郵税六錢

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

櫻痴居士福地源一郎著

懷往事談 附 新聞紙實歷

四月上旬 出版

蓋し櫻痴居士に二の時代あり、一は幕府の時、一は新聞紙の時、幕府の時は暫く言はざるべし、新聞紙の時代に於ける居士の才の名、如何ばかり夫れ高かりしぞ、烈しかりしぞ。中には慕悅の餘、謦欬に接するに由なく、半宵夢に居士に謁して、僅かに自ら慰藉し、且語て以て榮としたる者さへあり、其居士が文章を喜び、以て流麗と爲し、雋妙と評し、人より人に傳寫して諷誦追慕已む能はざりしが如きは、比々皆是なりし。今や居士敢て老たるに非ず、亦た老ずとせず、身を功名の世界に抽ざ、思を文藝の苑に馳せ、優悠自適、復た當時の才人たるを願はず、是に於てか徐ろに疇昔を回看して、懷に禁せざるものあり、坐ろに筆を援で二篇の文を成す、一を「懷往事談」とし、幕府の當時を記す、是れ獨り居士一身の經歷を知るのみならず亦當時の事態を知悉すべきもの、他は即ち「新聞紙實歷」、居士自ら稱して半世の境界、宿世の因緣といふ新聞紙の經歷、一世の視聽を傾動したる新聞紙の經歷、如何ばかり見るに堪へ、讀むに堪へたるかは世人の判斷に任せむ。若夫れ其文の老幹枝なく、心に稱ふて出で、筆に隨て抒寫し、坦易明快にして自ら人の心脾に沁せしむるものあるに至ては、則ち居士が文の進境にして、亦た居士が境界の變たる所以なり。江湖の君子幸に意を留めよ。

發兌元 東京日吉町 民友社

第四

國民小說

四月上旬 出版

目錄

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

德富猪一郎著

國民叢書第五冊

文學斷片

紙數二百八十五頁
定價十五錢
郵稅四錢

所謂純文學は文學者をして之を作らしめよ。但た文學を論じ文學者を論じ社會を觀じ天然を感ずるに至ては獨り之を文學者に委ぬべからず。著者は文學者に非らず。故に本書に所謂純文學なし。然れども其文學を愛好し、且文學者に望むの餘、迸て論説となり、人世を觀し天然に感ずるの餘、溢れて小品となり、彫琢を假らず、巧思を求めず、思ふて言はざるはなく、言つて透徹ならざるはなく、其腸に於て其眼に於て、將た其手に於て(淺薄にせよ、高尚にせよ)一點不健全、不透明の分子なく、思想意見すべて純粹敦厚に歸するは、自から本書の特質なりとす。本書載する處、明治二十年より昨年に至る、短篇長章、凡そ四十餘篇とす。文字の末に於ては暫く言はず、其見る所感する所、果して正鵠を得るに庶幾からざるや否や、願くは江湖諸君子の眞判を俟つ。

平民叢書第九卷

哲學變遷史

定價十二錢
郵稅二錢

系統尤も古く範圍最も大なる學術界の帝王は哲學是也學術界を貫通する脉管たり思想界を縱横する經緯線たり或意味に於て十九世紀文明の血液たるは哲學也。古今東西大家名家の學説紛々として雨の如く哲學の海茫々として津涯を知らざるを歎ずる者に尤も欠く可からざるは哲學史也哲學變遷史也、哲學變遷史は哲學の串綑也哲學の系圖家譜也一目瞭然たる側面圖也。哲學尤も知らざる可からず、哲學史亦尤も知らざる可からず。好良の哲學史は哲學海の舟筏也。平民叢書第九卷は此尤も必要なる需に應ぜむが爲め最も斬新且最も精明透徹の評ある泰西のオーソリチーに據つて謹嚴精明に上タールスより下今日の哲學者に到るまでの哲學思想の變遷を論盡し其變遷の次第、進化の順序、相互の關係を明々白々に叙論し加ふるに我邦の哲學家中尤も識見透徹蘊蓄深奥の譽ある某學士の丁寧周密なる校閲を經たるものなれば其精確斬新蓋し尋常哲學史と大に軌を異にする者あらむ。江湖の諸君一本を購ふて其然るを知られよ。

發兌元 東京市京橋區日吉町 民友社

家庭雜誌

〇毎月二回十日廿五日發兌

定價

一冊　金五錢　郵　金五厘
半年（十二冊）前金五十錢　地税　金五十六錢
一年（廿四冊）同金一圓　方共　金一圓十二錢

〇廣告料一行（廿四字詰）一回ニ付）金八錢

〇本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

發行兼印刷人　垣田純朗

編輯人　塚越芳太郎

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

印刷所　東京市京橋區西紺屋町　株式會社秀英舎

本社電話番號七十番

明治二十七年三月廿五日發行

家庭雜誌第貳拾六號

目録



家庭雜誌第貳拾六號

(明治二十七年三月廿五日發兌)

社説

談話の種子

附　世間の出來事を知る可き事

談話は面白きものなれとも、動もすれば、其の種子の絶ゆることあり。況して家に在ること多くして、外に出ること少なき婦人に於ては、特に其の然るを見る也。一家團欒の際にも、何時も同し言を繰り返すは、何となく興味を減するものなり。客に對しても、天氣の挨拶一通り濟みたる後は、ハたと行き詰りて、何の話頭も出てぬは、何となく不躾の看なきにあらず。加之談話の種子に窮する時には、同し言を繰り返すは、尙ほ恕す可し。動もすれば、他人の惡口、若しくは鄙猥なる話頭に點することあり。所謂る『物言へば唇寒し秋の風』とは、此の事なり。

されば談話の種子の絶へぬ樣、常に心掛け置くは、最も必要の事と云ふ可し。

如何にせば、談話の種子、滾々と湧き出る樣に、出來く可き乎。別に面倒なることにあらず、唯だ世間の出來事に、注意すれば、幾何も出來るなり。何となれば世の中には、恒に色々の出來事、廻り燈籠の如く、油斷もなく、出て來れば也。

小說、芝居抔の談話は、往々不健全なる分子を含むものなれば、寧ろ餘りに凝らぬ方よかる可し。併し世には、小說、芝居等の外に、色々の出來事ある也。福島中佐、郡司大尉、相馬事件、その他世間一般に評判する事柄は勿論。左程評判なき事柄にても、少しく氣を付け心を留れば、面白き出來事、澤山あるものな

り。若し新聞紙を讀まば、一枚の新聞紙にても、色々の出來事あるなり。若し此等の事を知る時には、求めずして、色々談話の種子は、湧き來る可し。必らずしも他人を惡口せねばならず、芝居、小說の談話のみに耽らねばならず、又たつまらぬ言をも、幾度もなく繰り返さねばならぬ氣遣はなきものぞかし。

世間の事に氣を附け心を留れば、獨り談話の種子に富むのみならず。何となく世間を吹く風向を知るなり、何となく心も廣々となるなり、何となく氣も丈夫になるなり。然る時には、つまらぬ事にくよくよと恨みかこつが如き愚痴は、何時の間にやら、消へ失せ去るなり。言葉を換へて曰へば、其の氣品も、人物も、自から高尙になる可し。故に一擧兩得と爲す。

或は世間の事を知りたりとて、何の利益あるぞ、生意氣なることを爲さずとも、婦人は婦人らしかれと云ふものあり。併し世間の事を知らねば、子供の敎育も出來ぬなり、家内の取締りも出來ぬなり、若しくは夫婿の内助となることも出來ぬなり。されば世間の事を知るは、談話の種子を得るが爲めのみならず、又た自家の氣品を高尙にし、心胸を快活にするが爲めのみならず。又た一家の主婦として、其の責任を盡すに於て最も忽かせにす可らざるなり。一言すれば世間の事を知るは、入用と云はんよりも、必要なり。知るをよしとするのみならず、是非共知らねばならぬなり。

されと無暗に喋舌り散らすと、談話の種子を貯ふるとは、別事なり。如何に談話の種子多しとて、相手を撰はず、勝手次第に喋舌り散らすは、甚だ見苦しきものにして、最も戒愼す可きものぞかし。儉約して財產を貯ふるはよけれども、有るに任せて、遣ひ散らすは、甚だ惡しき事なり。沈默して木佛の如きは、決して感心せされども、度に過ぎたる多言は、別して感心す可らず。

談話の種子は、成る可く精を出して貯はへよ、而して相手を見、場合を量り、程能く之を試む可し。愛嬌も、風品も、交際も、實意も、快樂も、程能き談話の中にありと知らずや。

史　談

歐洲諸國王家の片影（二）

三、西班牙

當時歐洲諸國君主の年長者は英國女皇七十六歳、最も幼きは西班牙國王アルフオンソ十三世當年僅か九歳なり。

西班牙！西班牙の字は曾て一たび歴史に赫々の輝を放ちしも、今は唯昔語りとなりぬ。殊に此五十年間は政變紛々已む時なく、今日と雖とも共和黨はやゝもすれば異圖を懐き、無政府黨は偏に此危邦を尋ねて暴行す。斯る困難の中にあり、纖弱なる婦人の身一とつに當年僅九歳の國王を扶け、内は背き易き民に臨み外は交り難き列國に對する攝政太后の苦心は實に一ト方ならざるあり。

太后名はマリイ、クリスチナ、墺太利皇家の連枝なり。十六年前先王アルフオンソ十二世の后に立たれぬ。當時先王は愛后メルシーヅを結婚後五ヶ月に喪ひて失望遣る方なく、再婚に進む氣もなかりき。然るに臣下の勸促已むを得ず墺地利の皇女と其の別莊に相見らるゝや、皇女の室のテーブルの上には亡后メルシーヅの畫像を飾りあり、先王覺へず立寄つてつくゞ畫像を眺め入られけるに、傍らより聲も細く囁く者あり「妾か願ひは唯何事につけても此方に似參らせむことに候、妾假令此方の跡目に坐はり候ふとも、此方を妾に思ひ代へさせ參らせんなどゝは思ひもかけぬ事に候へば」

と。一語深く先王の心を動かし、墺地利家の皇女直ちに西班牙皇后とはなられける。年又年過るにつれて先王は愈〻皇后の人と爲りの敬す可きを認め、年々結婚の週期毎に寶石の腕環を贈られけるが、最後の腕環には左の短箇を添へありたり。

朕か兵士は戎衣の袖に金條を附して征戰に從へる度數を表す、朕は御身が寡人に與へ玉へる幸福の年の數を御身の腕上に見んことを欲す。

此短箇を書きて五六日、先王は肺病重りて俄かに崩ぜられたり。此は今より十年前の事なり。

夫王は俄に死なれ、跡には身重き吾と五歳と三歳の皇女、心打明けて共に悲む可き者もなく、殊に外國より來れる身として西班牙の民に愛せられず、王位の競爭者は此時に乘じて人心を煽動し、國內黨派の軋轢不平は此時を以て益募る。實に味氣なきは太后此時の心中にて、歐洲諸邦の人士は此憐れむ可き寡婦の前途を危まざる者なかりき。然るに風吹てこゝに柳條の却て折れ難きを見る如く、是迄あまり外に出づることもなく勿論政治に半點のインテレストを示さゞりし皇后は、忽然として玆に男も及ぶまじき氣象を露はし、喪服の袖に淚揮ふて熱心に西班牙法典の研究を始め、內治外交の入りくりを研究し、聰明にして腦髓の堅固なるに顧問の舌を捲かせ、折りしも大烈風の災害ありければ、身重き身をも厭はず直ちに其地方々々を巡廻し、手づから被害者に救助を與へ、斷々たる擧動衆人の耳目を驚かせり。斯くて數月の後擧げられし一子は、即ち今のアルフオンソ十三世なり。

太后の氣丈の婦人にして、亦懇切により人の心を懷けらるゝは隱れなき所なり。曾て或貴族の年少士官あり、太后の婦人なるを侮つて少し違禮の言ありしかば、太后直ちに命じて牢に投げ入れ、千謝萬謝の後漸く釋されたり。また共和黨の文人シルヴィオなる者、叛逆の

文字を公にしたるの廉を以て國外に放逐されしが、跡に殘れる其妻貧苦に迫り、太后に上疏して赦免を請ひければ、即ち赦されぬ。シルヴィオ歸國して御禮に罷出たるに太后は色々物語りの末「卿はあまり豊かならぬ方なりと聞く、卓越の文人は豊かに暮す者稀なり、卿に幾人の子供ありや」と問はれ、六人の子供ある由答へ申せば、「六人とな、其はあまり多し、半ば余に分たれよ」と。是れより共和黨文人の女三人は御手許金を以て官立學校に學ぶこととなりぬ。斯る類の例は擧ぐるに堪へざる程なり。左れば初め太后に對して冷淡なりし西班牙の民も、王の誕生あるにつけ、太后の男々しき氣象、懇切の情を見るにつれ、何時しか同情を寄することゝなり、貴族の連中には太后を押柄と做して惡む者あるも、百姓貧民などは却て尤とも王家の忠實なる僕たり。太后當年三十七歳。幼王の姉君アスチュリアス内親王十四歳、同マリアテレサ十二歳、共に伶悧俊美の少女なり。

生れ落つるより早や王と稱へられて、保姆の手に抱かれて滿廷の朝臣外國の使臣に謁見を賜はりし、幼王につきては可笑しき事も少なからず。例へば謁見の禮半ばにして齁々然と眠り、或は列座雲集の中にて寳位の階段を獨り上り下りして樂み、或は謁見に參りし老臣を捕へて共にグラ〳〵馬に乘れよと勸め、長々しき僧正の說敎に立腹しては帽を取つてハタと地に投げ僧正をニラミつけるなど面白き事もさま〴〵なりけり。また曾て其保姆を罷む可き事となりし時、幼王は甚しく泣き、保姆も又泣きしか、保姆は一計を案じついて、明日朝見の時斯く仰せある可しとて其言を繰り返へし〳〵よく〳〵教へけり。翌日朝見の禮始まり、滿廷の臣下雲の如く集まりし時、寳位の上なる孩兒王は蕾程の口を開いてイトも嚴かに宣ふ樣「保姆は歸す可からず、朕之を嚴命す、朕保姆を止め置くことを命ず」と。

満廷歎然たりしが、陛下の勅命なればとて、保姆は留め置かれぬ。

また五歳の頃、日々車に乗りて外に出でらるゝに、年の頃相似たる跛の乞食の小供ありて、車の後を慕ひて慈惠を請へば、幼王は殊に之に同情を注ぎて多く銅錢を投げ與へ、保姆を車より下ろして彼の爲めに投げし銅錢を拾ひやらしめ、しば〳〵見返へりながら去らるゝを常とせり。其年幼王大病にて一時は生命危かりしが、一日熱やゝさめて食事せらるゝに、不圖思ひ出たる樣に母后に向ひ「母樣アノ跛女は今如何して居ませうか、小子の樣にたべて居ませうか」と問はれぬ。母后「ソウサナ、彼兒は達者だから和子のたべるよりも澤山たべるだらふが、貧しい者だから堅いパンをたべるだらうよ」。小さき王は暫く默然としてスープを食いやめて居られしが、頓て「母樣、何故アノ跛女に何か御やりなさらぬの？」。母后は返事もせでおはせしに、幼王はます〳〵せき立ち「母樣、小子かあなたなら、甘しい物を彼跛女にやりますもの、此樣なものでもやりますもの」と言つてテーブルの上に載せたる或食物を指さゝれぬ。其夜、熱また起りて譫言の中にも「彼跛女に甘い物を〳〵」と言いつゞけられしと。

今や王は九歳の童と長ぜられぬ。此れより後長するに從ひ、彼跛女を憐れみし心を忘れられずば、西班牙の民も亦幸ならむ。

四、和蘭

和蘭と云へば今は人口五百萬に足らず面積一萬三千方哩に足らざる堤防一壞水門一開全國水漬しとなる土地なるが、昔しは歐洲航海業の率先者として其國旗は遠く東洋の風に飜へり、また自由の鄕土としてドヴイツト、オレンヂの公などの據て以て歐洲の大壓制者に抗

敵したる土地にて、小なりと雖も進取有爲の氣象一國に溢れたる侮り難き邦なりき。我日本の如きも、此邦人の紹介によつて文化の澤に浴したるの恩誠に少しとせず。今や到底曩時の盛を望む能はざるも、近來商業貿易復興し、先王の憲法改正により人民參政の權はます〳〵増加し、枯木また花さくの感あり。而して國人自主樹立の氣全く衰へざるは、數年前日耳曼は和蘭を併す可しとの評判頻りなりし時、ビスマアク公は和蘭公使を請ふて日耳曼軍中尤も精鋭の譽高き兵士の身材六呎の上にも及ぶプロシヤ近衛隊を見せしに、和蘭公使はビスマアク公を顧みて笑つて曰く、誠に長大の兵士共に候、併し弊邦にては水門切つて一時に全國十二呎の深さに致す事容易に候へば、六呎の身材猶足らず候」と答へたる話に徵するも明らかなる可し。

和蘭女王ウイルヘルミナ、ヘレナ、パウリン、マリア陛下は當年十四の快活美麗の少女なり。先王ウイルレム三世の崩ぜらるゝ、他に嗣なきを以て位を嗣がる、即ち去る一八九〇年十一月の事なり。攝政太后エムマ陛下は先王の後妻、年二十にして六十過ぎし先王に嫁せられしが、夫妻の間平和にして、當今の女王を擧げられたり。太后は日耳曼一侯家の女、賢明にして人望あり、少さき女王を氣丈夫なる王に仕つけむと日々教育に骨を折らるゝなり。

ウイルヘルミナ女王、氣象快活の少女にて、戸外の遊戯を愛し、好み、巧みに六頭の小駒を御せらる。初めて女王の位に即かれし時、是れよりは女王に在せば今迄よりも一層オトなしくさせ玉ふ可き由侍者申けるに、女王世にも悲しげなる面地して「ソンナラ、此れから我身はアノ母様の書き玉ふ様に、山の様な紙に一々名を書かねばならぬか」と嘆息せられたりと云へり。

先年の冬、或日雪大に降り積みて滿地銀の如くなり

ける時、和蘭の都より二三里離れし或村里の學校の近所には、大勢の學校生徒等打群れて雪を、蹴立てゝ雪戰をなしける。戰半にして、村路を走らせ來る一輛の車あり。中には三十あまりの上品なる婦人と十二の少女と、猶他に一人乘り居たり。雪軍の場に來りし時、内なる少女は御者に命じ暫し車を駐めさせ、面白げに亂軍接戰の躰を見てありけるが、堪へかねてや車の戶押開きてヒラリと飛び下り、雪を掬ふより早く手近なる一人目がけて投げつけ、掬ふては投げ投げては掬ひ、良久しく雪軍に加はりて後、車の内なる婦人に呼ばれてニッコリ打笑いてまた車に上り去りぬ。幼生徒等は固より、村人も皆身方よき人とは思へど其誰なるかを知らざりしに、翌日王宮よりの下され物とて宮内の官人莫大の菓子の籃を此小學校に持ち來りぬ。籃には一通の手紙を添へたり。手紙には、幼なき手にて、

昨日は珍らしき雪軍に加はりて面白く候。此は少許ながら面白かりし禮に皆さんに進じ候也。

ウイルヘルミナ

科學

動物の生涯　第三

動物の種類

動物の種類は或る數種のわからざるものを除くの外、悉く名の知れたるもの二百萬種あり。此外古より此日に至る數十年の長き間に、種子の絶へたるものあるは言を待たざる事なり。地質の順序に隨つて地球の歷史を觀察するに、地球は少なくとも十二回の世紀を經たりと云ふが、その間に幾何の動物の種類が生じ、幾何か滅絶したるかは知るを得ざるほど也。古への或る詩人は、地球の内部に潜入せることを想像して、其内に生活せる動物の有樣を種々に形容して、樣々の奇

怪なる物語を作りて、人心を驚かせるが、科學によりてしらべたる事實は、此等の小說物語よりも一しほ驚くべき夢の如き小說よりも小說らしき事を顯はせり。』

さて長き時代の間に消へ失せたる種類に付きては、我等は植物の事を僅かに知り得しが如く、動物のことも僅か計りよりほか知るを得ず、シュップと云ふ植物は近頃漸く發見せられ、エールと云ふ木は僅かに此頃に至りて知られけり、其後大古の木にして知り得たるものは、少數にあらざれど、かゝる發見の原因をしらぶるに、大抵は今日ある所の通常の植物と關係あるとより知られたるなり。

小動物の必要

萬物の靈長なる人種が、天地自然の表面を變化するに與つて有する力は、絶大なるが如く云へなさるれども、實際は人類の力は、人類よりも不用と見へ、小さしとも云わるゝ小動物には如かざるとあり。海狸は年々英領コロンビヤの河岸に堤防を作りて、幾多の氣水湖水を作るかを見る人は、非常に驚けどもこは未だ小さき仕事なり。彼の熱帶と云はるゝアフリカの白蟻が家屋堂塔よりも、尙ほ堅固なる高塔を築づきて、秋天のころ洪水一夜の中に來るとき、人をして其上に上りて、からき生命を安全に生き長らへしむることあり。或は珊瑚の虫が、人の力の及ばざる海中に下りて、美事なる珊瑚島を建築するの大事業を見ては。人類の力は最も小さきものと云はさるべからず。

小動物は形の小さき變りには、夥たしき數によりて大事業を爲す。所謂る數にてこなすものと云ふべし。世界の大都パリの地盤は、極微細にして顯微鏡にて僅かに見るを得べき小さき水虫によりて築つかれ。七萬八千マイル四方あるフロクダの地盤は、貝の切れはし、及び珊瑚虫のみによりて作らるゝ也。白堊は多く貝殼より作らるゝことなるが、一本の白堊を製するに用ゆ

る貝の數は、幾許なるや殆ど數ふべからず。エレンボルグと云ふ人は山の上にありし四十尺の厚さある盤石の一寸立方に付き。數百萬の貝殼のありしを發見せり。

他の一方より觀察せば、細微虫は生命に關して大なる力あり。我等は多くのバクテリヤの雲の中に生長し、又た多くの病はバクテリヤに關係あり。佛國パリのモントソーリーにて空氣を試驗せしに、一メートル立方に八十四のバクテリヤあり。他の所にては更らに甚しきものあり。或る時蠶の虫が次き〳〵と死することありて、パスチユール氏の驗査せしに、バクテリヤのためなりしと云ふ。外科の治療を試むるに當り、最も恐るゝ所は、極微有機物のために、疵口の食ひくされさせらるゝにあり。リスター氏之が消毒法を發明なしてより、大に其の害を減ぜり。

動物の身長

動物の大さは、人目にも觸れざる極微虫より、怪物と呼ばるゝ古代の大蛇に至るまで、種々の大さあり。烏賊と云へば我等の食膳に上るもの計りかと思へど、左にあらず。ニユーフテンドレンドにては三十尺の長ある烏賊ありて、其様は龍の如き恐ろしきもの也。また前世界の動物にて、世界ありてより無類最大の動物と呼ばれしチタノソーラスと云ふ動物は、實に百丈の長にして、三十丈の高さありと云はる。鯨の骨の七十丈あり八十九十丈位あるものは、往々にして發見せらる。クヤブデシ、スユレスピーと云ふ魚は百二十丈と云ふ大なるものあり。虫の小さきに至りては、元より言を待たざるなり。

動物身躰の組織

動物の身躰の組織に至りては、更らに奇異なるものあり。毛虫の躰は二千餘の筋によりて作られ、我等人類の躰には、二百萬餘の氣孔ありて汚穢物水分を蒸發す。

之を管の如く並ぶる時は、其長さ十マイルに達せんとす。また人躰の血液は、百億とも千億とも計算の出來得ざる分子より成り、メイチルト氏の計算によるに、腦の中の黒質は、少なくとも六億の小穴より成ると云ふ。かく細密なる事情に至りては、之を知るは唯だ顯微鏡の力のみ。之を聞く我等は、殆と信ずる能はざらんとす。

生　命

人の生命は五十歳と云へども、兎は十年と云ひ、犬と羊とは十年より十二年、豕は二十年、馬は三十年、駱駝は百年、象は二百年、グリンランド鯨は四百年(?)に達し、鳥類の内にて鶚鵠は百年の間を長らへ、レーブン(はしふと)とて十里の外にありとも、腐肉の臭をかぎて飛び來る鳥は、鶚鵠よりも長生すと云へり。また魚類の中にては、鯉は一百五十年の長壽を保つべく、またパイクと云ふ魚は長さ十九フ井ートあり。三百五十ポンドの重量あるものあり。千四百九十七年サビヤにて執へたるものは、其頭に一の金の輪を有しけるが、其輪には『余は宇宙の主人なるフレドック第二世の千二百三十年十月五日潮水に放ち給へる魚の最初のものなり』と記しありき。去れば放たれてより執はれたるまで、二百六十七年生きたるわけ也。蛇の長命は能く聞く所なれども、龜は五百歳に達するものありと云ふ。之より一段下りたる下等動物に至つては、其生命の短かきは當然なれども、なほ海上の白頭翁は五十年生き長らへたるものありと云ふ。昆虫は一躰に短命なれども、大哲學者アリストートルの說によれば、女王蜂は七年生きたりと云ふ。またロンドンのラボックと云ふ學者は、女王蟻を畜ふたるに、十五年長らへたりと云ふ。世に短かき生命を蜉蝣に譬ふることとなるが、俗說には蜉蝣は一日しか生きずと云へども、其は誤りにして一週日位は長ふる也。

之よりなほ一層下等なる動物の生涯を觀察せんに、極めて面白き問題に出逢ふこと也。それは何ぞと云ふに、何れか其動物の本躰なるかを知るに苦しむ事あり。勿論。我等の親しき動物には此樣なることなく、蜂や蠅は、卵をすりつけ、卵は螟蛉または繭となり。それより蜂や蠅となることは疑ふべからず。故に此等の事を見ては、我等は蜂や蠅は第一に卵、次は螟蛉、若しくは繭、次きは完全なる虫となるの順序なりと云ふも差支なきが如し、然るに此に不思議なるは、或る種類の蚊によりては、卵より螟蛉となり、螟蛉が蚊とならざる中に、螟蛉自ら他の螟蛉を生み出すことあり。此かる時には、蚊が本躰なるや、螟蛉が本躰なるや、更らに知るべからず。これよりも更らに下つて植蟲と號する植物の如き蟲に至れば、此不思議は愈よ甚し。元來植虫は久しき間。植物に信ぜられしが、英人エリスが之を區別するに至りて、漸く別々の物と信ぜざるゝに至れり。

此等の植虫にありては、外貌は實の植物の如しと雖ども、枝の先の花托には、小さき海上の白頭翁に似たる動物的の構造を有し、其全躰を養ふべき滋養分を摂ゆるに足る手を具へたり。また此の花托の中には、色々ありて、卵を生む役目を有するものもあり。之を他の動物になぞらへて云へば、卵巣と云ふべきもの也。然るに不思議にも此の役目ある花托は、時として花托のみにて獨立の生命を保つことあり。故に何れが本躰なるか知るべからず。

動物の不死

以上の如き動物は、何れが本躰なりや知るべからざるほどのことなるが、實は何れが本躰にもあらずして、凡べて併せて一の物躰を形つくるものにして、𧋍蝴虫の如きは、其一疋が一疋にあらずして、數千萬疋が一疋の𧋍蝴虫なるもの丶如し、故に此等のことより推せ

ば、其一疋死するも、全躰は死するものにあらざれば、蚺蝴虫は千萬年も生くるものと云ふべく、此種の推測を爲せば、小動物にして百萬年も生きるものは少なからずと云ふべし。

文藝

春宵小話（トルストイ原作）

猿と豌豆《一文惜みの百失ひ》

猿が兩手に豌豆を一ぱひ入れて、こそ〳〵路をあるひて居ると、如何したはづみか、豌豆一粒掌から漏つてころ〳〵地上にころび落ちた。其を拾はうとすると、また二十粒こぼれた。其二十粒拾はうとして、今度は皆なこぼした。短氣の猿め大きに腹を立て、落ちた豌豆を八方へ蹴散かし、サッサと走しつていつてしまつた。

頭と尻尾の喧嘩《無闇な我意は張らぬもの》

「おれが先きに行く」「イヤサおれが先きに」と、蛇の頭と蛇の尻尾が喧嘩した。頭が云ふには、「これさ尻尾君、君が前に行つたつて仕方がないぢやないか、君は眼も耳も有たぬ癖に」。尻尾傲然として「何だと、ヘン失禮ながら乃公は貴樣を止めやうと行かせうと心任せに力を持つて居ますぞ、乃公が木にでも卷きついた日にやア貴樣は一寸も動かれまひが」。「ソンナラ仕方がない此れから別々に分れやう」。

話まとまつて、尻尾は頭に別れ、獨りぞろ〳〵這つて行たが。頭に別れると間もなう（肝腎な耳目がないから）直ぐ崖から落ちて、憐れ墓なき往生を遂げた。

わなの鳥《人多ければ事を破る》

獵師が湖の邊りにわなをかけて待つて居ると、夥しひ鳥がかゝつた。併しあまり鳥の數が多かつたので、網ぐるみ飛んで行つてしまつた。

獵師は尻引からげてあと追つかけた。ソレト見るより百姓勘太「オ、イ權七どん〱、何處へ行くだ、何だつて人間の足で鳥に追付かれるものかい」。獵師は走り〱後見返り「一羽か二羽なら棄ても置うが、數が多ひから、今まに見さんせ、キット手に入るに違ひないわ」。

果して、夕方になつて、(今迄一處に飛んで來た)鳥は一羽は森へ一羽は沼へ一羽は野らへと云樣におの〱好きな方に飛で行かふと仕出したので、其まゝ網ごとにドッサリ地に落ち、直ぐ獵師の獲物となつた。

栗鼠と狼《面白う浮世を渡る道如何》

一疋の栗鼠が枝から枝に傳ふとて、不圖飛び外して、生憎此の下に寢て居る狼の上に落ちた。狼めがくと刎ね起き、イキなり栗鼠を喰ひにかゝると、栗鼠は頻りに助命を歎願した。狼が云ふには「好々、全躰貴樣逹は如何すればいつも〱世の中を面白く渡たるのだ、其譯を話したら一命を助け呉れる、乃公はモウ始終世の中が面白ふなうて〱て暮すに、貴樣逹は何の術あればいつも〱木の間に飛んだりはねたり面白ふ暮すのだ」。栗鼠は恐る〱「ドウか先づ私を御放し下さりませ、其あとで御話し致しませう、私はモウ貴公樣が恐ふて〱なりませぬ」。

狼は栗鼠を手放した。栗鼠めヒラリと木の枝に飛び上つて、上から小さな首をチョイと出し、斯ふ云つた「貴樣が世の中は面白ふないと云ふのは、其筈ザ、一躰貴樣は性惡るだもの、貴樣が性惡なればこそ何時も〱心が面白ふないのだよ、私逹は何時もおとなしくして居る、誰にも惡い事をせぬから、夫れで斯う面白ふ暮すのサ」。

上等の梨子《眼で知れ》

極上等の梨子を買つて來ひとの命を受けて、使の僕は八百屋へ馳り越し「八百屋サン、極上等の梨子をお呉

れ」「ハイ」と答へて八百屋は見事な梨子を取出し見せれば、使の僕は不承知顔「八百屋サン、此れではどうも、極上等のを見せて下され」。八百屋「イヤサ、此れが極上等ので厶ひます、まあ一トつ食べて御覽じろ、斯んな風味は外にありませんぜ」。僕「唯た一つ食たつて、ドウして皆な甘ひか不甘ひか分かるものか、ヨシ〳〵仕様がある」と二三十の大梨子を一つ一とつ皆一ト口づゝ嚙んで見て、是れなら大丈夫と急ぎ持歸つた。其僕は直ぐ暇になつたとか。

續小君子

湖處子

（一）失望せし母を起したる少女

久子は愛らしき少女にして、去年の秋、戀しき父に別れ、母親と兩人で、毎日父親の存命中のことを語りつゝ、心細く暮したるが、久子は父親には別れても、まだ慕はしき母親に愛せらるゝゆゑ、餘り深くは悲みにも沈まざりしかど、母親は最愛の夫に別れたれば、久子の愛らしさを觀るつけても、尙ほ深く悲みに沈み久子遊びにゆきたるを幸ひに、隱れては、獨りもの思ひに沈みはつる程なりけり、親子の住める家は、昔し聞えし分限者なりしも、亡き人の種々なる失敗にて、財產を殘らず費し、少しの餘財とても食つぶして、洗ふが如く貧しくなり、今は早や屋根傾き壁は落ち、斯くなりては親はしき故鄕も、何となく好味氣なく、庭前の水さへも空しく流るゝ心地に思はれたり。母親が明ても暮ても、過越方や行末のとなど思ふに引かへ、久子はいつも面白げに裏庭に出でゝ、雞や鳩に餌物を與へつ、毎日嬉しく遊んで居りぬ。久子は嬉しさの餘り、突然に母をよびお母さん、まあ來て御覽なさいと云ふ。…母親は何事かと、裏庭に出でゝ見れば、久子が物

心なく雛や鳩に氣を採られて、嬉んで遊べるなりけり。

母親は小女に向ひ、汝は斯樣な喜樂な風をするが、追つけ此處を立退きて、隣の村へ移らねばならぬと、思はず口はしりて、涙ぐみぬ。少女は大に驚愕きて、ソット母親の側に坐はり、お母さん、そんなに、何故そう泣てるの。母は紊れし髮をかきあげながら、御身には話しても能く解りもすまいが、此家は隣家のものになりし故、お金がない故に立退かねばならぬ。久子は暫らく考へて、「お母さんそのお金はマッチの箱を拵らへれば出來るんだと、此間隣の翁さんがいっていたから、私は是から毎日マッチの箱を拵へて、どっさりお金をとってあげるから隣邑に行くことを廢止にして下さいなと、此小女の可愛らしく故郷を慕ふのさまは、母親に大なる希望を與へ、今日までの悲歎は殘らず消えて、我知らぬ勇氣を生じぬ。母はマッチ箱はりの仕事を得て、毎日早く起きて遲く寐つ、親子此家は安く暮しぬ。

(二) 妹を敎ふる姉

牛込のある植樹屋に二人の愛らしき娘があり。姉はたまきと呼びて七歲になり、妹は五歲でいと子とよびぬ。たまきは去年の春から小學校に上り、毎日精を出して勉强に日を送り、妹は幼な心に、姉さんの學問をしたり、お淸書をかくのをうらやみ、姉さんが學校から歸るとすぐに姉さんのそばにすはり、姉さんの勉强の邪魔をしつ、斯樣なことの度重なると、外の兒ならば煩さく思ひ御母さんに叱つて貰うが例なれど、たまきはいと子を親切にして。傍に遊ばせ、自分が温習を仕まひしあとにて、妹のために、學校のおもしろき遊びのお話しをし、又先生から聞きたる面白き話を話してきかせ、或るときはまた糸子は、自分にも、試驗をして下さいと云へば、試驗してやるなど、仲よく樂しく遊

びにき。此頃記者は、此家に植木を見に往きたれば、此少女等は、二人にて、南向の暖かな椽側に布團を敷きてそれに坐はり。前に話したる樣に、愛らしく遊んで居りぬ。記者は其愛らしさに見とれて、庭前に出で見て居りたるに、それとはしらず、たまきは妹に石盤を渡し、お前、今日はお前の名をかいて御覽んと云へば。糸子は太りたる足を出しながら、自分はまだかけないわと云ふ、それでも此間教へてあげたものをと、責められ、あゝそうと答へつゝ、釘の樣ないの字と、との字とをかきあげしが、姉は又妹に向ひ、之で何と讀みますかと問はれて、妹は澁りたる聲にて。いとゝよみますと答へ、姉は夫であなたの名が出來ましたから、能く記憶て居らつしやい、忘れてはなりませんよと確かめぬ。

父母は此樣子を見て、いとも機嫌よげに見えぬ。記者もうらやましく思ひて。暫く見て居り、植木よりも倘ほ一層樂しく思ひたりき。世に天の使と云ふものあらば、かゝる姉妹こそ夫れならめと、此家の言ひ難き喜樂の樣を、心に畫きつゝ歸りぬ。

（三）　雪中老媼を助けし兒

信州東筑摩郡山形村の或る家に宇之と云へる貰ひ子がありき。宇之は七歳のとき、村の小學校へ通ひ始めぬ。此あたりは山里なれば、學校までの里程二十町ほどもあれど。宇之は之を遠しともせず。毎日辨當を持ちて通ひ、日科を得るを何よりの喜びとせり。やがて十一月にもなりしに、寒國の事なれば、雪ははや六七寸も降り積もり、寒さ身を裂くばかりなりしも、渠は之が爲に怠ることなく、先生よりして、望みある生徒なりとして愛せられ、前の學期試驗には、第一等賞を賜はりし程、學問も上進しけり。さても寒は次第に彌増し、雪も次第に深くなり、生徒の多くは、欠席を届くるほどに、渠のみは一日も欠席することなく、或る雪の日

の夕くれ、烈しき寒さを忍びながら、自分の家に歸る途中、隣村の老媼、雪になやみて足蹈み损ね、下駄の緒をフツりきらしぬ。只さても腰の曲りて、歩行に難めるものを、思ひかけぬうきめに遇ひ、野中の事なればとて、艸は皆雪の下になり、一本の毛も見えねば、下駄の緒をつくろふものもなく、思案に暮れ果たり。宇之折りよく來かゝりて、いと氣の毒の事に思ひ、自分の本を包んだる布呂敷を破りて。老媼に與へ、下駄の緒を結ひてやれば、媼は世に天使童に逢ひたる心地して、幾度の禮を云ひぬ。宇之は風呂敷を破りたれば、母に叱られるゝと思ひて、心氣つかひながら。家に歸りて、途中の始末を母に話して、風呂敷割きたるとを詫びしに、怒らるゝと思ひの外、有り難き事をしぬと、大に母に褒められて面目を得ぬ。記者は優しき少年が斯く年老りを救へる實話を聽き、最と嬉しく、爰に其樣を記して、宇之君が如き少年の、我が國に多からんことゝ、切望に堪へず。

(四) 母への返禮

昌坊は、記者が友人の長男にして、横濱の税關山の父の住居にあり、今年尋常二年生となりぬ、去年の春、風をひきてうち臥しければ、母は心配して、毎日坊か傍にありて仕事し、仕事しながら看病しぬ、昌坊は、母思ひにて、母が少しにても外邊へ出つれば、お母さんの跡を追かけて行く程なりしが、いたつきしより母を慕ふと一層ふかく、坊の寝間より少し離るゝとを許さゞれば、母は唯坊が眠る機會を窺ひて僅かに用を足すほどなりき、或日母は坊にむかひ、坊がそれほどお母さんを傍において、病氣が全快つたら何云ふ返禮をするのと問はれ、坊は喜んて、はい余しか全快なれば、お母さんの御好なことを、なんでもして上ますよと答へければ、母はそれでは坊は何時でもお母さんの忙かしい時に、いつでも大なき聲をたてゝ怒るのを怒らず、

御母さんの云ふことをきくことが出來るの、出來る、何でもないと、よし、夫ならば其の大きな聲をたてゝ怒るかはりに、優しくするのがお母さんへの返禮だよ。坊は委細承知し。今度は必と左樣しますよ、何でもありませんと答へぬ。日ならずして病氣は全快り、學校へ行く樣になりぬ、母は昌坊が病中、仕後れの仕事を取り急ぎぬ。ある日坊は十二時頃學校より歸りて見れば、母は仕事の忙はしけにていまだ晝飯を出してないゆゑ、直ぐに癇癪をふり起して、大聲にお母さんを罵りたてぬ。母はじろりと坊をにらみ、それが此間の返禮かいと云はれて、坊はハタと行つまり、左樣であつた、忘れて居たと、云ふ顔つきにて、シツと空腹を堪へてお母さんが膳を出すまで默つてまちぬ。これを初めとして段々と小言を云ふと少なくなり、甘へることは多くありしも、能く母に順ふ樣になりにけり。誰もかくこそあらまほしけれ。

花の罪

筑峰女史

一きは目立つ家の搆へ何れの役所へ出勤か先頃までは朝夕の出入の人車かまびすかりけるもこの頃はいかゝ爲せしか音なふ聲も更にせざれば近隣の者どもいともいぶかり居たりける頃もせはしき黄昏時主人を先に六七人一度にどや／＼家に入り來り席定まらぬその先に奥の一間にとぢこもり主客もろとも花ふだに氣をうばはれしそが中に主人の運や弱かりけん連戰連敗いや負けに負けたりければ主人はいきまき居直りて今一勝負その代り家作地面も皆擧げて負けなば進上仕らんと心ある客の留るも聞入れぬその言の葉を聞取る妻はこらへ兼て夫の袖に取すがりいかに好ませらるゝ樂しみにもせよかほどに迷ひ込み給ふか情なや幾度申すも詮なけれ最後の合戰は何とぞおやめ下さるべしとすがり

つきて留めつゝこなたの人々をも顧りみて實に失禮には候得共妾が願ひ何とぞ早く御歸り下されかし手を合せて拜みますと言葉せはしくせき立れば主人は目をさか立て妻のとらへし袖をふりはなし無禮な女め失敬なりよきも惡きも我が存意客に歸れとはなを失禮何條そなたがさしで口だまり居ろふとねめつけれどこなたは更にひるむ色なく諫めつ賴みつ一生懸命涙と共にせき立つればサスが客人等も止まり難くあいさつもせでそこ／＼とにぐるが如く出て行く後に主人は打ち腹立ち他人の前をも憚からず吾を恥しむ失敬女今すぐ離縁なすほどにゆふよはならぬはやく行けはや出て行かぬかそこのけとせけどもこなたはすこしもひるまずむねんの涙飲み込んで申すもをこなる事ながらいはでかなはぬ今日のしぎ恥を知るは勇に近かしとまと恥をば知られなばなどて勤務を欠き給ふよからぬ遊びに寢食忘すれ朝夕釜の下煙り立ちかねるをも知り給まはず今日の最後の一勝負若しや不幸にまけもせばいかに金策なし給ふぞ家庫は人手に渡すは惜まねどたゞこの一人の娘が行末のみ思ひやられて夜もすがら眠りもやらで侍るなり是までは妾が持てる衣類は勿論櫛笄に至るまで一ッも殘さで賣代なしそれにてやう／＼間に合せて差上しが今は典物すべき物とてもなくなり果にし折もをり今日の新聞見給はぬか花して罪科に落ちたる人も多くあり侍れば若しもの事の有りもせば跡に殘りし妻子いかしてもや世を渡り人に顔が合はさるべき篤と御考へ遊ばせと新聞差出し示しつゝかくごなからも言葉をつゞけ離縁とあらば別れもせんさわさりながら夫が善からぬ道に迷ひ世間の人に指さゝれ家政困難に赴きしその有樣をよそに見て出で行くほどの薄情は妾には出來難し夫におやまちある時はどこまでも諫むるこそ妻たる者の責任とは信じ侍るなれかくまで諫め申すも御聞き入れなきか情なやいやしくもあなたも男子何卒

今より心を改めまことの人となりてたべと涙ながらにかきくどきかきくどきしもうたてやな夫は天魔の見入しか怒りの眼さか立て聲あらゝげ云わせてをけば際限なしイヨ〳〵不屆の女めとく出で行きねと責め立てられ何と詮方なく〳〵も十才あまりの娘をば殘すも不便と手を引て慣れし我が家を後に見て親里さしてぞ出て行く夫はもはや邪魔する者なくなれりと喜び再び惡友呼びよせて最後の合戰アナ無慘モロクも再び打まけて約束通り家作地面もろともに人手に渡す事となり今ははや無一物とぞなり果てゝ役目も止められ仕方なく知人の補助に露命をつなぐ計りにて茲に初めて迷ひの夢さめて妻の言葉にしたがはぬのみかは罪なき妻を離べつせし我があやまちをわぶるこそよけれと恥を忍のんで我が妻の親里がりを音づれて重々の不覺あやまれりと懺悔をなせば妻はいとそゞろ憐れを催ふして然らば共に暮さんと元の榮花に引かへていとさゝやかなる裏店住居内職なしてぞ日々の細き暮しをつゝけけるこは何の爲め忌はしさ花より外には原因なし嗚呼いましむべきは花なんめり

勤勉

霞村

（一）器械

北產商會に身を托して久しく千島にありし毛野駿逸、十八の春を迎え、五年振りにて主人の用を帶び東京に歸りぬ。彼は新橋より車を傭ひ、麻布なる故居に歸れる途々に於て、市街の光景の著しく變りしを睹て、痛く驚ける樣子なりしが、彼は終に其のなつかしき故居に着けるに及んでは、更に其の狀態の著しく變りしに、再ひ痛く驚きけり。然り彼か驚けるも理りなりしなり。

彼か無事なる老顏を拜せんとて樂しみ來りし彼れか父

は、彼か千島を出發する三日の前に還らぬ旅路へ急ぎ、急に寡婦となりし彼か母は、一人細き炊烟も立て兼ぬれはとて永く住み慣れし故居をたゝみて他人に貸し、己は狹き裏店にても借りて住はんものをと、彼か歸り來りし日とても、其準備を爲しつゝありし程なればなり。

彼には无論一人の兄ありき、然れとも兄なる彼は夙く別に一箇の家室を有ち、家族さへ多きに、去年商勢の順潮ならざりし爲め、尠からざる損失をなしたれば、今は家政も甚しく困難なりき。去れは彼か母も兄に賴るヿをば冀はざりしなり。

久しく見されは無事で相逢ふてさへ、言葉より先立つものを涙なりといふものを。彼にとりては天に慟し、地に哭しても飽き足らさる千古の恨事。涙なからに順序もなく母か語るを聽きては、遉鐵石の心膓も千々に碎けやしつらむ。答へさへなくて、聞こゆるものは唯號泣嗚咽の聲のみ。戶外は春の日麗に胡蝶輕く舞ひ遊ふに、戶内は宛なから秋の雨しめやかに、百虫露に咽ふか如し。

彼か長く泣けは泣く程、心弱き母を悲みに陷す所以。彼は徒に泣く可きにあらず、寧ろ母を慰藉ざるべからず。彼は空しく悲しむ可きにあらず、寧ろ母を鼓舞さざる可からず。彼は乃ち强て元氣を粧ひて言ひぬ。

愚痴を言へは限りはありませんから、最う諦めませう。遲れはせなからも兎に角此樣に歸るとの出來たのは何よりの僥倖です。就ては將來何うなさる御了見で御座いますか其を伺つて御相談申しませう。

此家の方は前言つた樣にして、私は他人の洗濯でもして上たら、何うかやつて行けると思つて居のさ。

其は餘り御氣强すきます。是から母上は洗濯……到底も出來ません。其は到底も……

母は言葉半はに遮ぎりて、白髮交りの頭掉りつゝ、力

なく言ひぬ。
お前此様なつては出來ても出來なくつても、爲なければなりません。が何に洗濯位い出來ないとはないよ。左様心配おしでないよ。
ですか母様餘り周章と可けません。私も一月は居る都合のですから、緩くり御相談して、互に隔別て居ても心配のない様にしませう。
彼は母をして洗濯の賤業、否勞苦に耐へしむるを忍ぶ能はず。如何にもして母を安らかに過さしめんと、只管に思を焦がしたれば、小夜更けて、臥房に入りしも中々に睡るとも得ならず。輾轉反側。倍々眼は冴ゆる計り、而して考慮は同じ軌路を脱しもやらず、一直線に行きつ戻りつなしぬ。
此家は小さいながらも亡父が家賃を出さで濟む様、一には周圍の作畑から少しつゝの収納を得て生計の立つる様にとて、貯金で買ふたのだが、今父が急死しては耕作も得ならぬから、最一層小さな家屋を借りて此家を貸し。而して家賃の餘りで何うか立つて行かうと。母は言ふので。成程是も一理ないでもないが、併し今度借りやうとするのは、安井の長家で五年前と變らないと聞けば。矢張り狹くつて、穢なくつて、殊には四隣合壁皆車力やか何かの寄合と來て居るから、朝夕喧しくつて仕様がない。母の彼の閑雅の性質で彼處へ行かふと言ふのは、餘程思ひ迫つたのだろふが、其こそ母の死を急かせるものだ。其に地ぐるみ家を貸した處で、借人が善ければよいが、惡ければ家は破壞され、地は荒廢され、其上家賃も小作も碌々收らないと來る。すれば却つて利益にならないから是非共茲家に居る様計らなければならん。此うなると歸する處は、如何にすれば此家を維持し得るかの疑問だ。
さて善き工夫もがなと、彼は忽ち當惑の頭を押さへ、

悲哀の喩を瞬きしが、再び胸中に獨語をつゝけぬ。
僕か貯金を悉皆出した所で、到底も母を安樂な地位に置くには足らす。去ればとて僕か此儘留まる譯にも行かず、如何したら好いか知らん。
かく彼は默考の裡に疲かれて、何時しか夢を結びたりしが、明ても同じく善き考案は立たす。主用を辨する中に何の決する所もなくて、早くも兩三日は過ぎにけり。
一日彼は朝夙く起きて新聞紙を讀み居けるが、突然新聞紙を持ちしまゝ一聲高く叫ひぬ。〆めた！
母は愕然顧みて問ひぬ。何だネ、眞箇に吃驚したよ、どうおしだえつ、
今日は火曜日ですかね、火の－水い－木と明後日は歸りますが、私は是から横濱へ行つて來ますよ。悉しい事は歸つた上でお噺し致します。
何だか餘り急はしないね、
母は主用にて急ぐとも出來しにはあらさるかと想ひたれば、深く問はんともせず、彼か支度するを助けて送り出しぬ。
果して二日を過ぎて木曜日の夕、彼は彼處茲處に車輪の夥しく着ける、一の大なる器械を持ちて歸りぬ。母は少しも合點行かず、
駿逸お前其は何だネ、耕作道具かえ？
否え是は母上の御仕事道具で御座います、
オヤさう、私は又よう似て居から耕作道具かと思て。耕作もしないから要ないのに何故お買かと思つたのさ。エ、どうも立派だネ、是か洗濯器械だつて、フン
職業の爲めに深く物案じせし彼れか母には、未た器械の精否は知れさるも、自己が使用すべきものと聞きては、如何に衷心から嬉しからさる可き。彼れ母は久しく笑ひしことなき口をも開いて、高齢にも似合はぬ高笑を爲して太く欣びぬ。梅咲けば鶯すら來啼くとい

ふものを。まして有情の彼、母か此情を看ては、何條滿幅の歡悦を秘くし得へき。彼も呵々も高く打笑ひて

同じぬ、

まー御覽なさいまし、構造が一つで、作用が三通りに分れて居ます。即ち之が洗濯ふ器械、之が壓搾る器械、而して之が平板して光澤を出す器械。子よく出來てませう。

左樣子ー、たが旨く行くだろうか？

其は請合です、買ふ時によく試驗して見たのですから。

彼は仔細に其用法を說明し、自ら器械を運轉し、母をして試驗せしめしに、衣服の汚點立に洗濯はれ、立に壓搾られ、立に平板されぬ。而も清潔く、而も光澤ありて。母は驚くと一方ならず。

オヤどうも早いとねー、老母は今迄此位に洗濯ふには四五時間宛もかゝりましたよ。其で到底もかう清淨にはならいのサ。が之では衣服を傷めはすまいか？

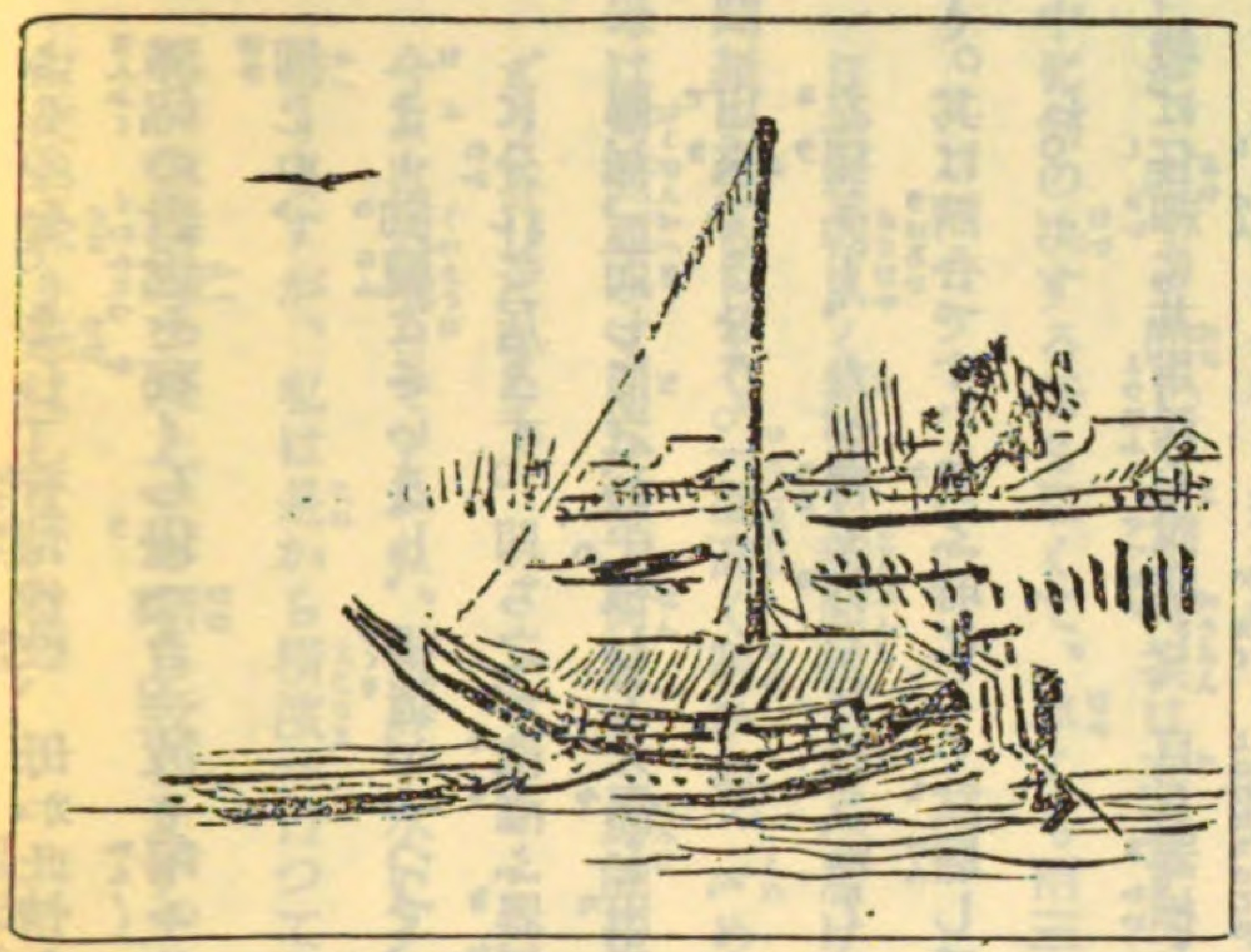
今迄のは皆其憂がありましたが、是は其を改良する爲に、英國の工學士か發明して專賣許特を得たのでして、日本へは見本として到着た計りのです、此器械では他人の器械の二三倍仕事か運びますから、洗濯賃は減らしても差支はありません。若し減らしますと忽ち客が増加します、其中に店か繁昌して來ます、從つて雇人を置く樣になります、其處で福の神か來ましてお金か澤山儲かる、而して其次には私の樣な貧乏人は出入るとの出來ない樣になります、へ何に戯言でせう。事の次第か左樣ですもの。ハヽ、ヽヽ

ホヽヽ、

柳烟暗き處に早く春は立つとや、實に和氣靄然たる門邊に既に幸福の春は立ちけるなり。

魚賣金藏の逸事

正味



築地の海岸から向ふを見ますと、白帆の影に隠れるばかりのちいさい島があります、ツイひとまたぎになりさうの處ですが昔から橋を架けず、渡船で往來をします、住吉の神社があり學校があり土藏などある棟高の家もありますが、一躰に漁師の家ばかりで、乾した網に薄霞がかゝり、木履で蠣殻をふみならすと千鳥が飛び立つといふ景色は、わづか渡船ひとつで、東京の市中ばかり見慣た目には、まるで別な土地へ往た樣な氣がして、春季などの眺めは一入氣がはれ〳〵とします、住吉の社頭にむかしから名高い藤があるといひますが、花の頃まゐつた事がありませんから、ツイそれには氣がつきませんが、白魚の名物なのは誰も知らぬものはありますまゐ、こう申せばアヽ彼處かと合點なさるお子供衆もありましょう、エヽその彼處ですよ、それあの佃島ですよ。

今から八十年ばかりむかし寛政の末にこの島に金藏といふ十二三の小厮がありました、一躰に漁師ばかりゆへ悪意はなくッても、氣が荒くッて、喧嘩なんぞは常事の樣に思ふところですが、そのなかでもこの金藏といふ小厮の、聞ぬ氣で負けぬ氣で、大人にでも何でも喰てかゝる、その勢には誰も舌を捲ぬものはなかつた

さうです、家は貧乏で貧乏で、金藏が毎朝雜魚を賣りに出てはその代て漸々その日の生活を立てる位でした、きかぬ氣の小厮ですから人並よりはいつも多く稼ぎを志ました、

島で小供の喧嘩といふと對手は替ッても主はいつも金藏です、對手の親が出てくるとその親へ手むかふ、誰の手にも制へきれません、憎まれつ子、世にはだかるとはあの小厮の事だと島中の憎まれものでしたが、當人はすこしも怖れません、氣まゝ一杯に惡戯をして居ました。

ある朝雜魚の荷をかついで、渡船へ乘り中央に突立て居ると、同じ島の魚賣が四五人乘合ました、金坊すこし傍へよれと一人がいひますと、金藏は例のきかぬ氣で何だ後から來たくせに、そこで澤山だとやりこめました、船頭は笑ひながら、金坊に逢ては誰でもかなはないな、といひますと、一人の年の老た魚賣がしけ〳〵と金藏の顏を見つめ、皆なにむかひ、どうせ此奴は疊のうへで往生の出來る奴ではないぜ、といひますと乘合一同は、本統に老爺さんの云ふ通りだらうぜと笑ひました、負ぬ氣の金藏、どんなにか咬て掛りさうなものだに老爺からさういはれると、何か顏はムッとなりましたが、急に空嘯いて知らぬ顏をして居ました。

「疊のうへで死ぬ事が出來ない」といはれたこの一言は、金藏が心に留ッて忘れません、覺えて居ろ老爺め、疊のうへで死ぬか死なぬか今に見ろ、とそれからは毎日これぱかり考へましたが、何でもあの老爺を見かへすには字を覺えて博識になつたら屹度よからうと、それから出入さきの最負にされる手習師匠の家へゆき、私も字を覺えたうござゐますから手本のふるいのを下さいましといふと、それは感心な事だと「いろは」の古手本をくれました、金藏は大喜びによろこび、歸つて

來ますと、直に手習をはじめやうとしましたが、机もなければ硯もなく、筆も墨も紙もないので、金藏はどうしやうと考へて居ました、いゝ事があらアといひながら、背戸から濱へ駈け出しました、丁度退潮になつて砂が一面平らになつて居ます、金藏はこゝへドッカと坐ッて手頃の棒をひろひ、手本を右に砂の上へ一生懸命に字をかきます、悪戯な朋輩はその前後をとりまゐて、金ちやんが妙な事をするぜとワイ／＼騒ぎます、金藏はすこしも頓着しません、毎日暇さへあれば根よく習ひましたが、とう／＼こんな事で假名だけはよめる様になり、それからは小供のもつ桃太郎だの何だの、色々の繪冊子を貰つたり、買つたりして讀のを何よりの樂みにしました、金坊はどうしてあんなに溫順くなつたらうと、噂さをされるやうになりました、

「疊のうへで死ぬ事の出來ない奴」だといつた老爺はよほどまへに妻をなくし獨身でしたが、この頃不手風をこぢらして長い事枕につきました、蓄はへる金があれば呑で仕舞ふのが漁師なんぞの慣習です、こう長い床については其日の事にさしつかへ、藥どころか食ふ事にも困るので、病氣のなほるせひがありませんでした。

老爺が病氣を朝晩見舞に來る婆さんが、ある晩老爺が枕元の窓の戸をしめやうとすると、小錢が五ッ六ッ載てありました、老爺さんこゝにお錢があるよ、どうしたのさと聞きますと、おらは知らない、それでは誰か置たのだらう、こんなところへ遺れるはずはあるまひと互ひにどう考へてもわからず、さし當り丁度明日のお米代がないからとその日の事に用ひました、翌日の晩もまた見ると載てあります、五六日こうつゞくので老爺も婆さんも不審にして、日頃信仰する住吉さまの御利益でがなあらうと、老婆さんはわざ／＼代參に詣りました。

誰がこう毎日めぐんでくれるか知らんと、老爺はその主が知りたく、餘程快くなつたので今日こそはと窓のそはへ床をよせて日の暮るのを待て居ますと、障子の外でチャラ／＼と錢の音が志ました、ソレと思ひ障子をあけますと、見つかつてはと驚いて逃出す背影、夕暮ながら、あの姿は金坊だなと老爺は思はず聲を立ました、金藏は呼とめられるのを顧もせず一散に逃て仕舞ひました。

「疊のうへで徃生は出來ない奴」だと人中で罵しられた、これがその返報でありました、怨に報ずるに德をもつてすといふ理を知つてしたか、知らずにしたかは知りませんが、この返報には老爺もまへの言を憶ひ出し額を撫て何とも言葉は出ませんでした。

金藏は老爺を救けやうとして平日より雜魚を餘計うつてその儲を知れぬやうに載ておいたのだといひます、こういふ心掛で段々生長しました、稼業にかけては人の二人まへも三人まへもはたらくので身代は段々よくなりました、暇があれば讀書をします、假名つきの軍書なぞから讀はじめて末には假名のつかぬものも讀るやうになりました。島の中のものは身分の名ひとつかけぬものばかりゆへ、いくら漁師でもそれではものゝ理がわからない筈だと、年々所得の幾分を積で、これで手習算盤讀書の出來る師匠をたのみ、寺小屋を開いたのが抑も佃島で敎育の開けた嚆矢だといひます。

とう／＼一代の内に身上をしあけ土藏つきの家を建て今にその子孫は島での屈指の豪富です、晩年になつてからは身代を子に讓ッて、自分は築地に隱宅を設けて安樂に世を送ッたといひます。

この人の著述は數種ありますが、どれも繪入でよく誰にもわかるように書れました、これはひとつは自分が子供のときを思ひ、無學なものを思やつて、書たものでしよう、

まかし其名は「五世川柳」といふ狂句の家元としてわけてよく世に知られました、稼業の餘事には狂句をつくるのを樂みにして緑亭また風叟といひましたが、四世川柳から點印をゆづられて、とう〳〵五世川柳となり、川柳代々のうちで中興ともいはれるほどで、卯木（初代柳亭種彦）などもこの社中でした。

この道でも一見識あつた事は、折々語格だの雅言だのゝ論が出ると笑ひながら、歌よみや俳諧師がその道々の事をもッて狂句のうへにあてゝ論ずるのは心得ちがへさ例ば同じ材木をつかふ職人にも、大工もあり建具屋もあり、指物師もあり木地師もあり、まだいくらあるかは知れない、大工の事は大工に聞くがよし、箱屋の事は箱屋にきくがよし、歌と俳諧と川柳とはおなじ木をつかふやうなもの、職人がちがふからな、といはれたさうですまた社中の野澤笑溪翁の令息が時々使ひなどにゆくと、貴下なども文武の道をはげんで出世なさるやう心掛けるが大切です、今から狂句なんぞにはまつてはいけませぬと口僻に戒められたさうです。

句はその頃の柳樽にいくらも見えますから一首二首

愛敬もしこめば自然徳がとれ

野澤氏の賢息が袴着を祝して

野の小松やがて太夫となるすがた

本姓は水谷、名は金藏、號は緑亭川柳、天明五年に生れ、安政五年に卒す、享年七十二、とものゝ本にとめてあります。

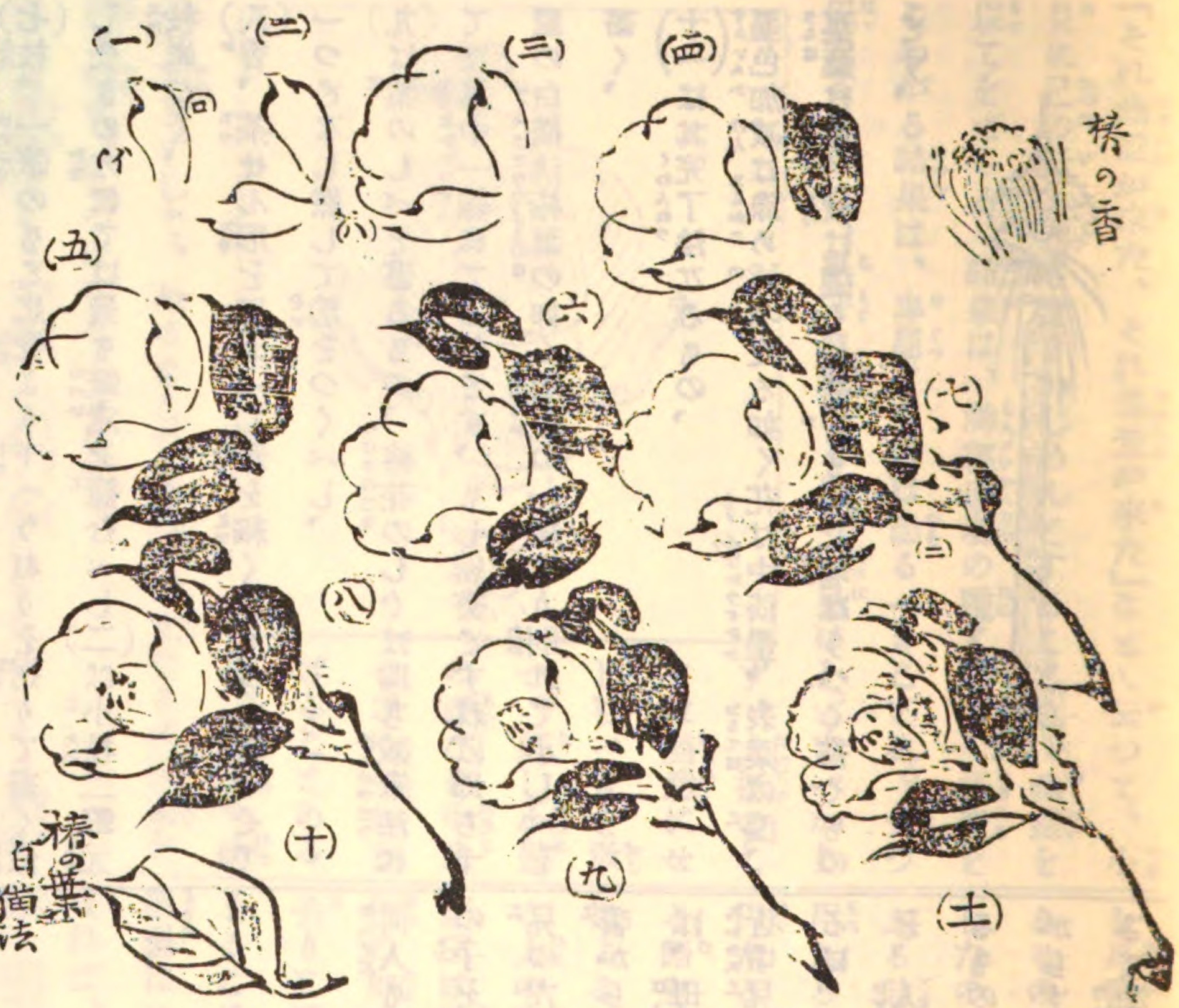
繪畫

畫學の栞（五）

金仙

一枝の椿花

即ち左の順序に就きて筆を用ゆべし、



（一）花瓣（イ）の如く筆の先に力を籠め圖の様にうねり形に線をかき（ロ）は同しく線の先に筆意を見すべし、

（二）同しく花瓣この花もと五瓣のものなれば即ち（一）（二）號は花の横斜に見しもの他は一線に止どめて畫く筆法は前に同じ、

（三）花の上より始まりて（ハ）號に終るつの字形を筆意輕妙に畫く、

（四）は葉、これは二筆にて墨色を見せて畫くものにて最初（四）の號の葉より始む筆法は、筆を横に太く使ふべし、

（五）同しく葉然れどもこは裏葉なれば墨色を淡くす筆法前に同じ、

（六）も葉（四）號の葉と同じ筆を横に下の方より先に始め今一筆は筆を下に向けて前の筆跡と符着する様畫く、

（七）枝、一筆のもとに先より下へうねりを送りて畫く然し先きの方にては最も筆意を籠むべし（二）は小枝二筆元枝につく、
（八）香、茶せん形を思ふべし筆を細くいくつかをよせて一つとなし然して瑙をつくべし、
（九）は葉のしべを畫るもの、椿花のしぐは即ち減筆法にては眞中一線にてよしとす、もし密畫とすれば即ち十圖の白描法椿葉の如く眞中の一線より別れて小しべを畫く、
（十一）は其完了法なるもの、
墨色加減は豫め述べたる如く花は中淡墨、表葉は濃、裏葉は淡、枝は濃くして香も同じ瑙はうつく畫くものとす、



家政

兒守の教育

何人も己の子を愛せぬものはなかるべし。去れども己の子を愛するとて、其の兒のみを愛すべからず。己の兒のために善からんと望まば、又た人の兒のためにも、善からんことを望まざるべからず。殊とに兒守のことは、母たるもの丶よろしく注意すべきこと也。
近頃兒守學校などのこと、人の注意をひく樣になりたるは、悦ぶべきことなるが、己の家の兒を托する兒守を、人の教育せんことを待つべからざれば、家の妻たるもの、先づ自から兒守を教育するの面倒を見ざるべからず。
さて第一兒守に教ゆるは何かと云へば、小兒を嚇すに

『それ幽靈が來た、それ巡査が來た』などゝ云つて、小兒に己の云ふことをきかしめんとすること也。幽靈を以てをどさるゝ結果は、神經患者の種となり、巡査をこわがる結果は、卑屈となるは恐るべきこと也。先づ母たるものは、兒守に敎ゆるに、小兒はをどすべからず、大抵のことは隨意にせしむべきを敎へ、好し小兒の遊びを中止せざるべからざることとあるも、巡査や幽靈を賴ますして、わるきことなれば、止むるの理由を語る樣に、しつけさるべからず。



第二は言葉なり、兒供は其最も親しきものより、萬事を見習ふものなれば、母よりも兒守の言葉を習ひやすきもの也。故に兒守にして『そうでなきや』とか『そうしたのよ』とか『ウ、』とか云ふ樣なる劣等なる語を用ふる時は、兒共は直ちに之を見習ふて、劣等なる語を用ふるに至るべし。元來、兒守に外の語よりも、家の母たる人の語を主として習ふべきものなれば、下等なる語を用ゆるは、畢竟家の母たる人の感化力の至らぬによることとなれば、子守の惡しき言葉を用ゆるは妻たる人の耻と云はざるべからず。

第三は風儀なり。風儀とて小兒をそだつるに、鉢植の松の如く、仕立つることはよろしからぬことなれども、去りとて、何事もあら／＼しく、犬猫の樣にても、こまることとなれば、相當の風儀は敎へざるべからず。此風儀はいつも野卑なる下女兒守のために、くづさるゝなれば、よく／＼下女兒守に云ひきかすべし。若し其家に奉公せんと思ふものならば、云ひまかすれば、中

く々に分るものなれば、怠るべからざることと也。

第四には陋しき歌を歌ふに困ることとなるが、これ必しも好みて陋しき歌を歌ふにあらず、歌ふべきよき歌を知らざるに原因するものなれば、無害にして高尙なる歌を、妻君より敎ゆるこそよけれ。何れの兒守なりとて『チッペラポゥ』なぞの歌をよしと思ふものなかるべく、よしと思ふても妻君よりよく〳〵其の理をきかせて、他の唱歌を敎へしならば、わからぬものはなかるべし。

其他困ることとは、兒守にして兒守の法を知らざることなるが、以上の如くいち〳〵と、世話をして敎ゆる以上は、大抵は通するもの也。また性質のかたくなることも、此くいろ〳〵の法を敎ゆると共に、妻君の志もわかりてさほどもにはなきものとなるべし、勿論此くてもなほ改らぬものは、免職の外なかるべけれども、妻君が己の子のためと思ふて、萬事、兒守を敎育する忍耐こそ、肝要なることなり。

細かき土も山となる

○小兒の風ひきたる時は、勉めて鼻くその鼻中にて固まらぬ樣にとり去るべし。若し鼻くそ固まるときは、鼻にて呼吸せず、口にて呼吸するために、氣關に障害を來たして、遂には甚しき病となるべし。

○大きくなるべき木が、適當の生長を遂ぐる能はざるは、何か其小さき芽の時に傷けられたる所あるがためなり。人の健康も、多くは小兒の健康にかゝわることなれば、小兒の時、其胃をさまたげぬ用心こそ肝要なれ。之につけても、幼稚園の小兒につめたくして、固き辨當を與ふるの害を早く取り去りたきもの也。

○小兒は育て方によりては、輕躁浮華ともなり沈着にして實地を重ずる人ともなる、小兒に園藝の樂を敎

へ、且つ與ふるは、極めて小兒を輕躁浮華の病より救ふの良計なり。園藝を好めば知らず識らずして、好き空氣を吸ひ、實地を重んずる沈着の人とならしむるを得べし。これはジヨンス氏の語也。

○過日或る街を通り、二人の小兒相語るを聞きしに、一人は十二三歳なるに、これより家に歸りて、小説をよまんとすれば、是非明日の復習をすてゝ供に來るべしと誘をきけり。此かることは、十二三歳の小兒の心より出ることとならず、必らず其家は小説好きの兄姉あるがためなるべし。學校友達には、よく／＼氣をつけざるべからず。放蕩するばかりが恐ろしきものならず、浮華なる友達も等しく避くべきものなり。

料理法

しらゆき鯛

金魚の母親かと疑ふ計りなる、美わしき鯛は、これよりをい／＼漁師の網に上せられて、人間社會を見物に出でかけん。これを捕へて食膳に供せば、老人は生命の伸びるを感し、小兒は生長の速かなるを覺へん、白雪鯛は、殊に調理の中にても味よきものなり。此作方は、鯛の切り身に、ばらりと鹽をふり、之を熱湯の中に入れ、花の如くちゞれ、雪の如く白くなりたる時、引き上げて、目のある籠に上せて、水氣を去り、之を布切に入て絞り、身をはら／＼に碎だき、骨を脆く拔き去り、別に葱、胡蘿、大根等の具を作りをきて、碎きたる鯛と、その具とを、温かき飯の上にのせ、先きに鯛の身をひたしたる熱湯に、味を付けて、飯の上よりかけて用ゆべし。

卵燒豆腐

豆腐を一寸角位に切り、能く湯出て、くづさゝる樣に引き上げて、籠にならべて水を切り、醬油と砂糖と鷄

卵とを混ぜしものを、豫じめ豆腐を串にさし置きて、付けながら燒くべし。又た湯出たる豆腐を醤油、砂糖にてざつと煮付け、之を油を引きたる鍋にて燒き、板と板との間にはさみ、上より重しを置きて、一夜しめをくもよし。

霜ふり白魚

鯛、平目もしくは、こちの如き、肉の白き魚を三枚にをろして、皮と骨とを拔きて、擂鉢にて擂り、之に少量のうどん粉を混じ、此の中へ白魚、もしくはみつば、牛房、せり、はつ茸、ゆば等作らんと欲する種子を投じて衣となし、薄鹽の湯の沸騰せしもの丶中に入れて、ざつと煮る時は、名に等しき霜ふりを得べし。

菊花どうふ

豆腐を二寸四角位に切りて、角を去りて、八角の形となし、半分所位迄庖丁の目を入れて、煮へ上りたる湯の中へ入る丶時は、四方へ開きて、菊の如き形となるべし。但しこれは、熟練せざればくづる丶の恐れあり。卵を入れしくづ又は生姜醤油をかけて用ゆべし。

まんどうず

何魚にても魚の擂身を、蒲鉾よりは少し和らかめに擂りて、之に椎茸、平麩、木耳、人參、牛房のきざみたるものと、好みによりて銀杏、麻の實を加へ、之れに温飩の粉に、鷄卵を解き合せたるものを混じて、豫じめ太き青竹の兩方に、節をのこして、二つに割りたるものを作りをきて、その中へ入れ、蒸し燒かば、竿の如き形となるべし、之を小口より切り、醤油を付けて食すべし。

牛肉もどき

煎海老を一寸位に切り、葛の衣を掛けて、榧の油にて揚げ、牛房の皮の黒き處を去り、白水に能く濕して、あくをぬき、堅魚だしを用ひて能く煮上げ、さてその二た品を裏こしの白味噌に和し、山椒をふりかけて用

ゆるなり。

魚饅頭

常の饅頭に用ゆる如き粉を、魚の身に擂り、交ぜて能く混和し、小倉餡を詰め、蒸籠に入れて蒸し、榧の油にて揚げ、燒き目を付くべし。

樂しき家庭

やぎ生

亂れたる家庭ほど不愉快のものはあらず。家庭の亂るゝや、夫は妻を叱し、妻は夫に抗し、小兒は爲すところを知らずして悲鳴す、斯くては、家庭に於ける樂しきことゝ、快きことゝては、寸毫もなし。これ畢竟、一家の主人たる者、苦みのみを分ちて、樂しみを共にせざるより起ることにして、樂しみを分つと否とは、一に主人の心如何にあり、又これによりて、樂しき家庭ともなり、不快の家庭ともなるなり。

然るに世間には、苦のみを家庭に分ち、快樂は己が專有物の如く心得居るものあり、そは主人の辛酸より得たる金錢を以て、一家の生活を爲すより、妻子は主人の命とさへいへば、少しの無理あるといへども、御無理御尤と逆らはずして、唯々諾々す。されば主人は、己が云ふことには、ケチ厘程も無理なしと思ひ、益我意を逞ふし、家庭に於ける大納言の氣取りにて、遊興費は槪ね一人にて消費し、家族をばおのが御用達と心得、無暗に使役して欲を充たし、少しにても氣に向かざるときは、目を丸くして叱咤す。家族はまた主人の怒りに觸れざる樣、戰々兢々として日を送り、主人の外出することあれば、厄病神の出で行きし後の如く、笑の聲は家内に滿つ。此の如き形勢にては、樂しき家庭を望むも到底能はざるなり。

樂しき家庭は、一家の者苦樂を共にするを要す。即ち

災害を被ることあれば、一家擧てこれが任にあたると共に、快樂も亦これを分つべきなり。春暖き日の郊外散歩、夏日の海水浴、花見、遊山、觀月、雪見等、凡そ日頃の欝を慰むる塲合にあつては、己れ一人これを貪らずして、必ず全家のものに分つべきが肝要なり。斯くするときは、家庭は求めずして平和となるべし。平和なる家庭は、即ち樂しき家庭なり。こゝに於て乎、夫は出でゝ家を忘れず、妻は夫の安全を祈り、子弟も亦父兄を慕ふ、偶團欒するに及むでは、嘻々として笑ひ、快々として語る。人生の快事此上なし。

婦女職業案内

三たび「メリヤス」編につき

本雜誌第十八號及第二十四號に於て、高等なる内職と題して「メリヤス」機械編が婦女兒の内職に最も好適する事を再度までも記したる處、職業の有志諸卿は自身若しくは其兒女若しくは妻女に見習せんと希望する人續々と「メリヤス」編の詳細を尋ね越され中には青年書生の男子も一家の業として此職業を習得せんと希望せらるゝは、兎に角祝賀すべき事共なり。

扨有志諸卿より我社に向け「メリヤス」編の詳細を尋ね越さる件々の數ある中に、一般の讀者諸卿にも參考ともなるべき要點を茲に掲ぐれば(第十八號及第二十四號遺漏の點を)第一製作したる「メリヤス」の販路なり、改良小丸等の機械によりて日々一「ダース」半より二「ダース」以上製作する品物は如何にして賣捌くかと尋ね越さるゝ人多し、我社は此業の問屋若しくは製造業者に就き問合せたる事ありしに、毛絲、木綿物等の「メリヤス」編帽子、靴下其他の製作品は都下は申すまでるなく地方にも増々需用者多き傾向あり中には靴下の如きは靴の勢力中等社會以下に多數の需用者を見る今

日なれば捌方甚だ宜しく、且つや日本製の「メリヤス」編物は重に支那、朝鮮、土耳古等の外國に輸出する道なれば、何程內地に製作品の充溢する事あるも決して其販路に苦しむが如き事なく、其直段に於ても外國輸出の道あれば內地のみの需給の多寡に依りて大なる變動あるべからず、兎に角今日の處にては內地向にても輸出向にても毛絲製は一「ダース」三十錢以上の利益あるは確にして、勿論其人々の巧拙にして、價に高廉はあれども內地問屋又は小賣店に於ても、素人の內職に依りて得たる製作品は、丁寧にして瞞着したる處尠きゆゑ喜んで買入るゝ由やに聞けり。

次は製造場なり、東京府下に製造場の數尠からず先月(一月中)の調査に依れば「メリヤス」編營業者組合の數百十餘家なり、中にも日本橋、本所第一多數を占め神田、京橋等之に亞ぐ、勿論其中には毛絲編を專業とするものあり、「さらし」屋と稱して木綿一方を遣るもあり、絹物を一業とするもあり、何でも屋もあれども「メリヤス」機械を用ゐて「メリヤス」編を營むは一なり、「メリヤス」編組合事務所は日本橋村松町にあり。

職業有志諸卿の中には直ちに機械を買入れ直ちに其傳習を得んと欲するもの比々なり、されど芝愛宕町國友機械場に於ては第二十四號に於て挿圖を以て詳しく記したる『改貝小丸』は今日注文し置くも十月か十一月ならでは製造出來致さず、勿論舶來品はあれども價格高きに過ぎ、又府下各製造場に於ての製造品は數多く且つ價廉なれども、其堅牢なると確實なるは國友製造品に及ばざる由、機械等は永久の用具なれば始めより確實なるものを購求し置くは將來の利益と知るべし。

「メリヤス」編傳習所は別に看板を出して敎授する製造所もなけれども府下最寄々々の製造所に就けば營業の傍ら傳習を得せしむるもの尠からざるべし、製造所に於て昨今は一寸閑なる時節にして六七月よりは冬物の

仕入に多忙なる由但し單純なる編物則ち靴下、手甲等の如きものは二個月の修業時間あれば熟練に至る事容易なり、然れども修業期の遲速、製作の巧拙は其人々の器用不器用にあると知るべし。

『改良小丸』の運轉は少さき把手にて轉廻自任するものなれば十歳以上なれば何人にても取扱ふこと甚だ簡易なる機械と知るべし。

横　機　械

前述『メリヤス』編につき『改良小丸』の外に『横機械』なるものを要することを陳じたり、何故に此『横機械』を要するかといふに『改良小丸』のみにては巧に筒形の「メリヤス」編を製し得ると雖も、靴襪の口元又は手甲等にある如き畝織其他縞又は綾織を爲すことを得ず、故に『改良小丸』のみにて製したる靴襪等には別に口織を要する事をも記し置きたり。『横機械』は其名の如く機械の運轉横に動く、横に動く毎に林立せる兩側の機針出沒突退の神變自在なること實に驚くに堪ゆ、又機下に臂の如きものあり、機端の「ツメ」と共に動かせば一側の針と一側の針と齟齬して別に面白き編方を現はす、普通の横機械則ち畝織のみを製するものには一個の「ヒヨツトコ」なるもの機針の上に臨み絲を送るの用を爲す、綾織等を爲すには五個若しくは六個の「ヒヨツトコ」を附屬せしめて其用を爲さしむると雖も針の出入に餘程の手數を要すると知るべし。而して此機械と『改良小丸』とを以て盛に機械を運轉する時には、一日に五十圓の原料を要するが故に、大なる製造場ならでは資本金に差支ゆることあり、されど此機械とても別に大なる勞力を要するにあらず婦人にて立派に取扱はるれども『改良小丸』よりは多少の勞力を要せるが故に各々製造場にては大低男工を用ゆ、其故は一日に三十圓以上の原料を物品に製作し得らるゝものなれば、到底男工ならでは充分に機械の全力を盡さしむること

能はざればなり。横機械は舶來品に佳良なるものあれども、價格甚だ廉ならず、矢張國友『メリヤス』製造場に於て『改良横機械』と稱するもの營業者の間に評判宜しき由價は五十圓位にして之に機械針の價を加へ六十圓内外なりと聞けり、其詳細の事情に至りては他日其機械の圖畫を添えて説明するの期あるべし。

手藝案内

襦袢

東京の人は男女共「シャツ」の如き舶來的無意氣なるを厭ひ寒天の日と雖も、必らず素肌に襦袢を纒ふ又東京人に限らず婦人にして「シャツ」を着る時は女學生染みて何となくいかつく見えるなり、故に女子社會には襯衣は必らず襦袢に限れるやうにて「ボタン」附の無意氣とかは小供が女書生の外はあらじと思ふ。

こゝに襦袢の裁縫を記さん、先づ本裁男襦袢は袖と胴同じ布帛を用ゐんとならば木綿巾一丈五尺五寸の布帛を以て其中より片袖各二尺五寸兩袖合して五尺を取りて、一尺二寸五分丈の袖と爲し、其殘餘より八尺二寸を裁ち去りて之を「身ごろ」と爲し殘り二尺三寸を縱斷して繼ぎ合せて襟と爲す（襟山繼）而して襟肩の明は二寸とし、さて縫方にかゝるなり、縫方は別に申すまでもなく、背より縫ひ終り、腋筋を縫ひ（裾の方にて二寸五六分より三寸位を明く）袖を附け、最後に裾は裁放しにては不躰裁ゆゑ細かく三つに折りて縫ひ留べし。

布帛地は如何なる物を用ゆるかといふに、誰人も知るが如く、不斷着は白木綿の類を用ゆるが、早く汚目の見えて洗濯を數々するゆゑ用品隨一たるべけれども他の木綿切を用ゆるも妨けなし、晴着は先づ今日の流行品は胴を「フランネル」か「セル」か市樂織かを用ゐ、袖

を水色縮緬にし襟を黑八丈か黑魚子かを用ゆるもの多し。

次に本裁女襦袢は木綿巾一丈五尺八寸五分を以て、其中より各袖三尺宛合計六尺を裁ち去り（男物より二寸五分程も長き方と知るべし）「身ごろ」七尺六寸を取り、其殘餘の分を縱斷して繼ぎ合すことと前述男物と同樣なり、而して兩身ごろを二ッ折に爲したる所則ち襟の處にて襟肩二寸二三分を明く、斯く裁ちたる襦袢の丈は一尺九寸にて少々短き嫌あるものは總身ごろを八尺として二尺の丈にするも宜しく、八尺四寸の總身ごろとして二尺一寸の丈とするも隨意たるべし、併し長を好めば夫丈の布帛地の長を要すと知るべし、縫方は先づ袖を表より一ぱいに縫ひ又裏より縫ひ返し（一度縫のみにては裁口バサ／＼となる恐あるゆゑ）次に背筋を縫ひ吾方へ折り返し次に脇筋を縫ふなり（無論裾の處にて二寸五分を明く）それより袖附を適宜に明け、其次に八ッ口を明け、裾は男物同樣細かく三ッ折にして縫ひ、最後に後襟を縫ひ附け襟の方へ折りそれより裏襟を附けて括る事と知るべし、但し襟巾は三寸一二分が通例なり。布帛地は不斷着は男物同樣白木綿か又は小紋形の如き木綿物を用ゆるが宜しけれども、晴着は胴を「フランネル」にして袖を緋縮緬か幽禪縮緬にするか、又派手を厭ふ人は袖を水色縮緬か近來の流行色なる藤紫色にするもさら／＼妨げあるべからず、又た胴を小紋縮緬を用ゐ、裏に紅絹を附け袖を幽禪縮緬と緋縮緬の表裏と爲したる袷襦袢を着る人多し、襟は近來の流行に隨へば淡色の無地か模樣のアッサリしたる縮緬類をつけても宜しく、禮式用には白縮緬か白綸子の半襟勿論たるべし、近來は博多織やら繻珍織やら種々のものを用ゆれども、丈夫向にして汚目立たぬは近來流行となりたる「ブラシ」といふ舶來布帛地にして、これは小兒の帽子や女帽子や鳥打帽子や、巾着嚢物

等の如きものに用ゐらるゝものにて天鵞絨よりも上品且つ實用的なれば半襟用には至極適應せるものと知るべし。

次に本裝となる直ぐの前則ち十五六歳の人が着る四ッ身繻袢の裁縫法を記さん、一丈五尺六寸の布を以て四ッ身襦袢を裁つには先づ袖各二尺六寸兩袖合して五尺二寸を取り兩身六尺四寸を脇にて襟巾二寸を裁ち去り其裁ち去りたる方の身ごろの中央の折目にて兩身共合せたる儘襟肩一寸五分を明くべし。其縫方は第一に袖を縫ひ第二に背筋を一ぱいに表より縫ひ又裏より縫ひ返し第三に脇筋を縫ふ(裾にて二寸四五分明けて)第四に袖口五六寸を附け、八ッ口は二寸五分許を明け置き、それより襟をつけ、最後に襟巾を二寸五分にくけるべし、布帛地は男女に從ひ不斷着、晴着とも各其宜しきものを撰擇すべければ茲には贅せず。

筆の序に一ッ身、則ち二歳許の小兒の襦袢の寸法のみを記せば、木綿巾三尺八寸の布の中より兩袖一尺を取り尚ほ二尺を取りて身ごろと定め、殘餘の八寸を三つに縱斷して接ぎ合はせ、襟肩は身の巾を中央より折り又之を横に半折したる所に八分位を明けて前身を裁ち去るべし、其縫方は前に準じて針を運はゞ決して間違あるべからず。

社交一斑

流行の栞

袷衣の準備

梅花已に地に委し彼岸櫻正に綻びんとし逐日春暄早や綿入を脱し炬燵を撤するの時節となりければこれよりソロ／＼袷衣の準備を爲すも必ずしも大早計とすべからず

男物には大島紬物擬らず宜しく次に繫系織、市樂の淡色徴塵若しくは子持筋金通し等の細かき堅縞最も流行の傾向を有す而して少しく安價なる物品に至りては毎號の本紙上に見ゆる結城紬、節絲織銘線等にして其の丈夫にして何人の着するも似合ふべきものは夫の秩父

縞と斷言するも妨げあるべからず扨前記入墨系織及市樂の裏地は中花色絹或は淡花絹最も宜しく其他のものに附するの裏地は羽二重金巾なることは申すまでもなし次に婦人物は小紋縮緬の薩摩筋、京お召の淡色微塵縞及小紋形の縞の如き若しくは例の小紋織のお召最等は流行の最なるものなるべく、稍價の廉なるものに至りては米澤糸織なるが夫の八王子より出づる糸織の方充分に需用者の意に適すべし、其縞柄は筆紙もて寫し得べからざる種々珍奇の縞柄あり(價三圓五十錢より五圓五十錢)。平民的流行物に至りては男女を通して綿秩父縞を第一とす、これは一見本場秩父縞と甲乙あるべからず、而して其價は僅に一圓を出づる二十錢にして加ふるに丈夫なる點に至りては木綿物の中にて多く其比類を見ず、次に佳美にして外見甚だ體裁の宜しきを得るものは「イギリス」織と稱し殆ど山繭織に髣髴たる珍品なり、其の縞柄は淡色地の竪縞最も袷衣に宜し（價一圓五錢より一圓十錢其他の平民的流行物は例の双子なるが絹物同樣追々夏向ともなれば白つぽい淡色流行の勢力を有するに至るは勿論なり

帯は男物に一般に行はるゝは片側紺無地或は黑無地或は鐵色の無地に片側は白茶の微塵縞を以て第一とし、次は前記の色に片側は薩摩筋の如き凡て變りし竪縞を以て第二とす、次は繻珍織、これは申までもなく日を追ひて流行の度を高めり最後に至つて記すべき者は或る一種の社會に流行する男帯なり、これはお納戸、紺の獻上にして是又繻珍同樣の流行の勢力を有す。次は女帯に移る丸帯又は腹合帯に至るまで繻珍一品に限ると申すの外なし眞に女帯社會は繻珍の世とはなりたりけり

『相老じめ』と『勇み締め』

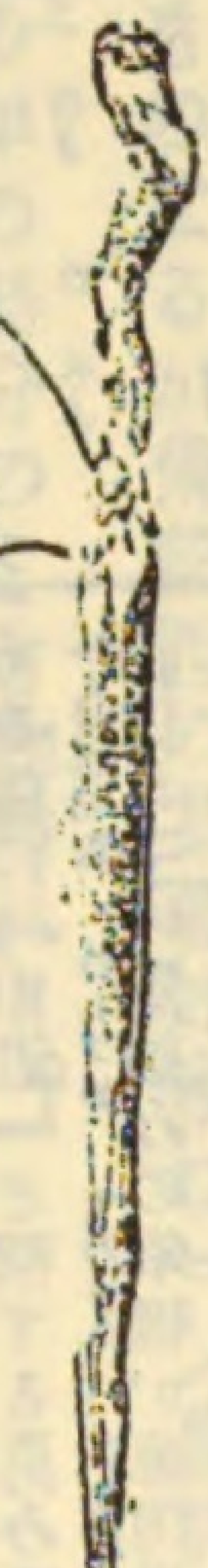
二つとも近來流行の女帯留なり、前なる『相老じめ』は過る三月九日天皇后皇兩陛下結婚滿二十五年に當らせられし祝日より賣始めたるものにして直段の安直なる爲か、意匠の面白き爲か非常の賣行きあり、妙齢の婦人の間に用ゐらるゝを見受けらる、其の『相生じめ』の名を附したる所以は、通常の帯留の如く一條の紐ならず、夫婦相老共白髮を意味して丸打二本の絹紐を金輪にて繋ぎて一條と爲し、前金具を以て引懸くる趣向なり、前金具は種々の種類あれども最も多く行はるゝは二葉葵にて一葉は金色とし一葉は銀色として其色を分ち、紐も一條は純白にして他の一條は紅又は紫を取合せ美觀此上なし、素より二色にならざるもの即ち兩方の紐共紅、藤紫、ひわ、眞白等兎に角派手やかなる色流行す、これは多く若き婦人の愛顧を受くる品なれば其色合も強めて常ならざるべからず、而して其價は絹包み心入三十錢、絹打は一圓二十錢内外。次なる『勇み締め』も亦婦人社會の愛玩となる、されど此帯留は、令孃、令閨等の如き高貴の間に行はれず、重に意氣なる社會に流行す、前金具を鐵の轡の引懸にして紐は絹にて細く白と紫又は白と鐵、白と錆と綸分けし工合、遊び工夫と申す外なし。

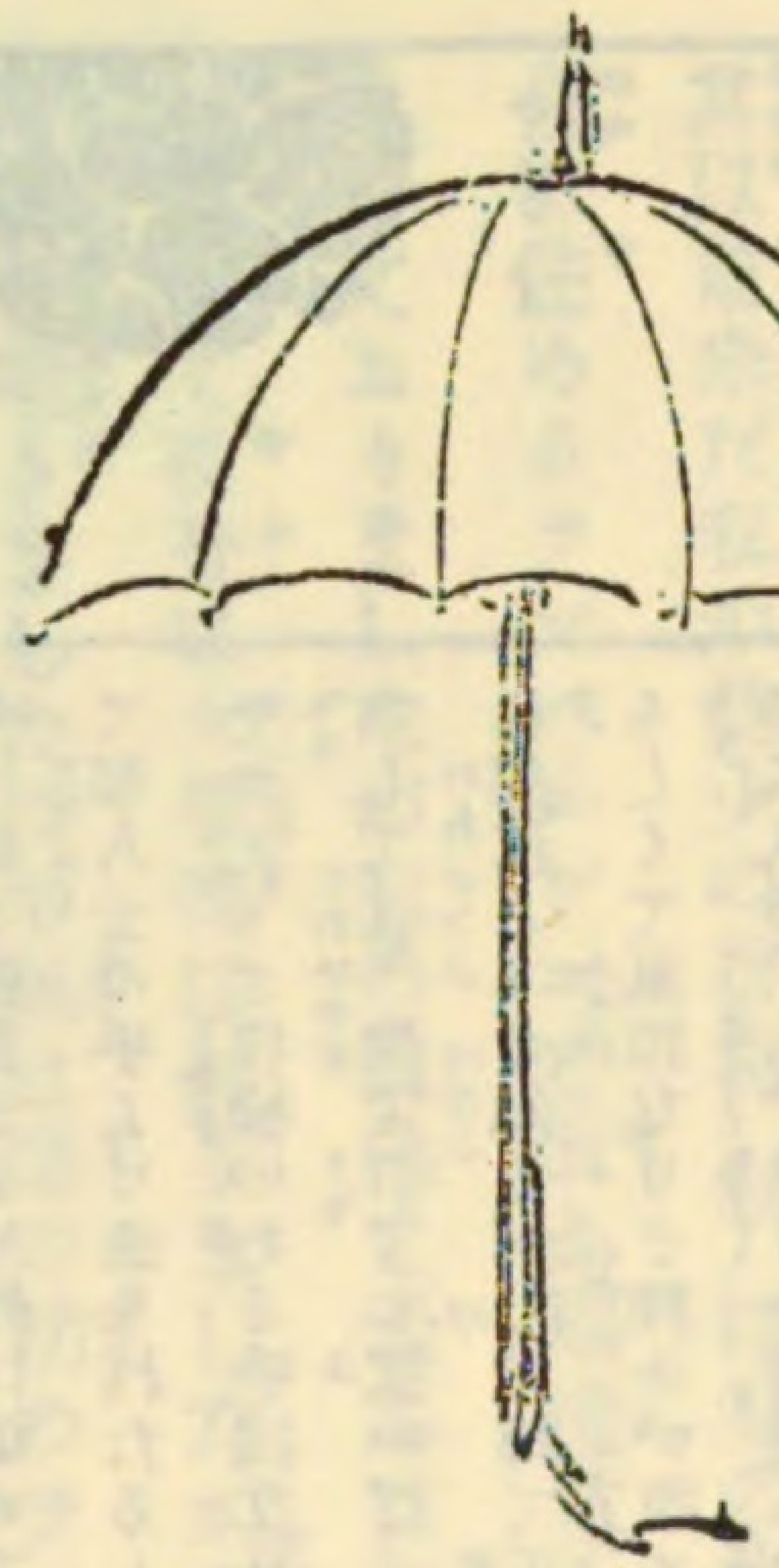
黑鼈甲の平打簪

平打簪の流行は銀の平打のみにては飽らず、尙進んで鼈甲にも其



勢力を及ぼしぬ、其流行形は繪様によりて示さるゝが如く黒鼈甲の上に蒔繪を施し紋入深彫か金鐵具の彫込か芝山の彫込（芝山の彫込とは象牙の彫込あるをいふ）丈五寸前後紋の大きさは大なる形にて直徑九分小なる處にて六分内外の形最も流行し價は一圓五六十錢より五圓前後の品賣行き宜しとの事なり





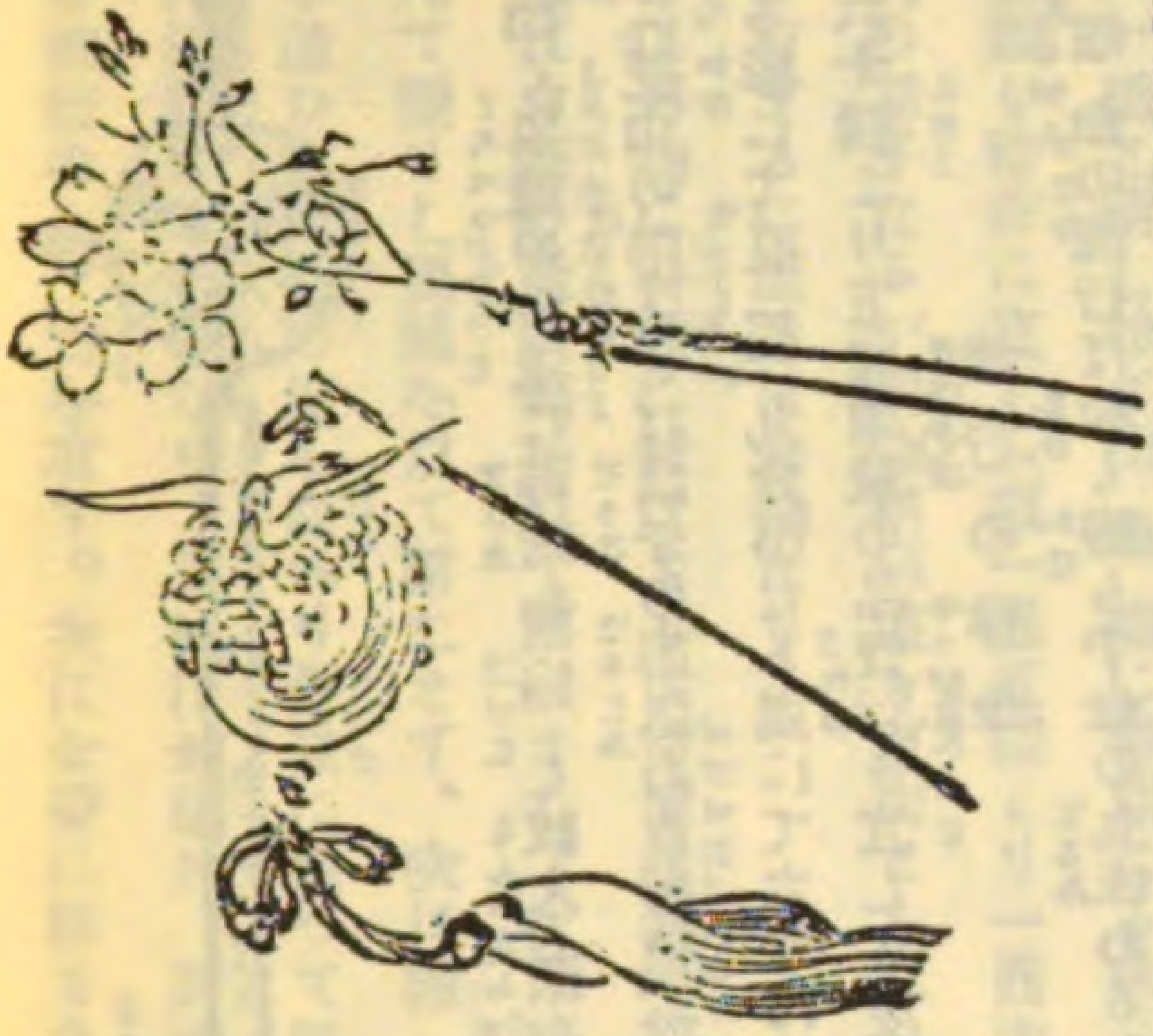
流行の洋傘

蝙蝠傘の流行は相も變らず傘の丸味あるを尚び骨八本なるが流行第一の位置を占め「パテン」一般に傳播せしと雖も上等社會の流行に至りては然らず却つて彈機あるを貴むの傾向あるは「パテン」の餘り武骨なる爲か、男子社會にては『細巻』と稱するもの專ら行はれ、巻けば唯の「ステッキ」の代となるホッソリとしたるもの愛玩せらる。而して布帛地は上等にて繻子綾織「モアル」、紋織等（價五六圓より八九圓）にして、色は男物にて黒、「リヨン」海老茶、女物は藤、紫、海老茶、黒等の色合なり。中等以下の流行品は綾甲斐絹、琥珀等の布帛地に、色は女物海老色、黒、海老黒、男物は黒、「リヨン」海老茶等（價一圓五十錢より二圓位）なり、普通の品は例の綾毛織にして追々夏向となりたりければ蝙蝠傘の流行も追々と盛に赴きかゝれり、扨握柄は人造象牙と稱せらるゝゴム細工に種々の新形を顯はし、女物には太く長き方流行し、輪になりたるものも盛に行はれ、男物は自然木か根附竹最流行す、而して儀式用には是迄日本人は彼我の差別なく滅茶々々に使用し來りたれども、近來は其使用に區別を立て祝賀用には純白葬吊用には純黒を用ゆる事となれり、流行品は舶來品もあれども南傳馬町坂本洋傘店（仙女香）にてくさ〴〵の奇品を盛に製作すと聞き及びぬ。

流行の手拭

一體の流行形を言へば白地に紺か淺黄のアッサリとしたるもの最も多く坊間に見受けらる、其の第一の流行形を示せば挿圖の如く、手拭地の右方の上端に、屋號か姓名の頭字を牡丹崩しに見せ（其摸樣は全體を見せず七分位を片隅に懸置くを宜しとす）左端には印を程能く置くなり、其模樣の色は、一方が紺なれば、一方は淺黄にし、一方が淺黄ならば、一方は紺に染むる方對照甚だ宜しく、譬へば、右端の牡丹崩しが淺黄なれば左端の印置は紺にすべし、從來印置は茶を用ゐたれども、當





今は紺と淺黄とより外は染めず。最も野暮なりとて都人士の手より去られたるものは、淺黄地にグチヤ〳〵と模様のある手拭なり、こんな物を懷中して會席で口でも拭かば、忽ち田印とて通人に笑はるゝと知るべし、却て正紺地の手拭は野暮らしくて風雅なりと粋とか通とか呼ばるゝ人の懷中に入る、眞黒々の紺地に山道と雪降等の散しある俗に『山道』と稱する勇み手拭は舊に依りて神田ッ子の鷲掴みの掌裡か、魚河岸連の肩に引つかゝると知るべし、白地と水色との半々にして模様をアッサリしたるもの亦商家の景物等に流行す。

花簪

過日の銀婚御式にては桐や菊や蝶やの金銀「モール」製花簪を翳の花とせる婦女子をタント見受けたるが、其後も矢張り金銀「モール」で頭部を光らせけれども、早や彼岸も終り愈々春の時候ともなりぬれば、夏を知らする時鳥早くも娘小童の頭上には櫻の花は咲にけり。花には紙、寒冷紗、絹、羽二重、摘み製等の差等あれども美にして且つ艶なるは摘み製に如くはなく、製作も天晴精巧の域に進みぬ櫻の簪にはあらねど、圖の如き新形則ち摘製にて鶴龜の上下より相向へる楠玉、偶々十二三歳の少女の髮に翳さゞるを見る、其可憐其精巧の作何物に譬へん樣なし、天上の姫ならずも人の手にてかゝる佳品の製し得らるゝとは、さても開化の世とはなりにけり。

日用物價

◎白米・（一圓に付）一等米八升九合二等米九升三合三等米九升六合四等米九升九合五等米一斗〇二合
◎雜穀　●本貫大麥二斗九升●臨場大麥三斗●裸麥二斗二升五合●相州小麥一斗七升●船橋小麥一斗七升五合●肥後上小麥一斗七升五合●常州小麥一斗八升二合●下總小麥一斗八升●千葉小麥一斗七升八合●札入竹林麥一斗六升並一斗八升●上割麥一斗七升並一斗九升●佐野搗粟一斗五升●室蘭小豆一斗二升五合●中手小豆一斗四升五合●本場達摩金時一斗三升●銚子隱元八升七合●庄内平豆一斗七升五合
◎鹽　●赤穗三俵七分五厘●大鹽并に入家三俵八分五厘●本齋六俵三分●新齋七俵一分
◎糖　赤穗上銘七分二三厘●金上上銘七分六七厘●攝州白糖一俵〇八厘●金上八軒物一俵一分●兵庫羽糖十六貫ゟ十七八貫

雜錄

遺珠顆々

○心配　エドウアド、ヘール

一時に一種の心配よりなすこと勿れ、世或は已に過ぎし心配、現在の心

配、此れより後の心配、三種の心配を一時に併せ帶ぶる者あるなり、

〇些細の働　ウオヅウオルス

些細の働きも斷りせぬ間は眞正の働きなり、賤しき友をも輕々しく待つこと勿れ、野菊も其さす陰に日を遮りて露ふ露の玉の緒を繫ぐにあらずや、

闇夜

無一生

世には闇夜を怖はがる少年あれどもこれは寔に謂れなきとなれば怖はいと云ふ念に打勝つ樣にせねばならぬものなるが佛蘭西の某著述家はコノ事に付いて自個が少年の時分のとを物語れり。

其以前未だ私が幼少の折柄私は私の從弟と一緒に田舍に住めるランペルシエと云ふ緇徒さんの許に世話になつておりましたが私の從弟と云ふは大の臆病者にて取別けて夜分は大層怖はがりましたが私は酷く從弟の臆病を嘲りましたので果は師の坊のランペルシエは私の高慢を蒼蠅イとに思ひ玉ひ口では彼の樣に剛いとを云ッてるが實際は如何であるか一番私の勇氣加減を試めし遣らんと一策を設けられました折しも丁度森羅萬象物の哀れを添ふる秋の日脚の短くて今宵は空さへ甚く打曇り一寸先は鼻抓まるゝさへ知れぬ眞の闇時に師の坊はヤオラ寺院の鍵を取出し卒とて私の手に渡しと私に命じ玉ひしが其折師の坊には酷く私の剛いとを賞讃し玉ひしにぞ私は否應なしにコノ役目を務めねばならぬとゝなりました。

私は灯燈も點ずに出懸けましたが寺院へ行くには墓場を通らねばならぬが私は更らに怯えゝ色なく墓場を通過ぎました。

頓て寺院へ參り入口の戸を開けまするど天井の方に當りて何ならん物音がしましたが私にはコノ物音は人の音聲の樣に思はれて俄に怖氣立ち私の勇氣も挫け初め

ましたが夫れでも私は内部へ這入らうと致しました併し漸ッと二歩三歩前方に進みましたが私は礑と歩武を停めましたコノ廣濶な御堂を領して居る黒白も分かぬ眞の闇を見渡し私は髮の毛の逆立つ迄鬼胎を抱きました今しも私は後邊の方に尻込みし戶外へ出まして齒の根の合はずガタ〳〵慄へながら逃出しましたが寺院の庭で其名をシユルタンと呼ぶ小さな犬に邂逅ひましたがシユルタンが私に纏綿ッてジヤレ懸るので私は地獄で佛の思ひをなし漸く心安堵ましたが吾れながら吾が意氣地のないのに心耻かしく氣を取直して後へ立戻りました併し私一人で行くのは心淋しい故シユルタンも私と一緒に行ッて貰らふ樣に誑し賺しましたが生憎とシユルタンは私の後に尾イて參りません私は急はし氣に寺院の閾を越へて中へ這入りましたが今しも漸く寺院の中へ這入ッたばかりで叉もや怖氣付きましたが今度は初手より一層烈しく丸で心が轉倒して了ッたので說敎場は御堂の右手の方にあるとは百も二百も承知して居りながら怖はさが一杯で夢我夢中で飛込みましたので方角を取失ひ長い間左手の方を探して居りましたが其處邊に列んで居る腰掛の間に陷迷ッたので自分は那の邊に居るとやら何處が說敎場やら何處の入口の戶があるとやら毫も見當が付きませんので實に何と申して宜イかお話にもならない程心が轉倒致しましたが其內に漸く入口を發見し這々の躰で戶外へ出ましたが最早懲々しましたので晝日中の外は向後决して自分一人で寺院に這入らぬと堅く心に取極め初手と同じ有樣で寺院を後に致しました。

私は漸く本坊へ辿り着きまして內へ這入らうと致しましたが家にはキヤツ〳〵と笑ひ動搖めく中に師の坊の聲を聞取りました私は家内の人達が私の一身に付イて笑ひ動搖めくものと見て取りましたので其中に師の坊より吩咐けられた役目を果しもせず阿容々々滿坐の

中に耻面を曝らすのを口惜しきことに思ひ如何はせんと入口の戸を開離て居りました頃て師の坊の令嬢の聲として私の一身を氣遣ひ下婢に灯燈を持參せよと吩附け師の坊は彼の大膽な私の從弟を從へて私を搜索に行かんとせらるゝ氣合なるが定めて後にて家內の人達は暗夜を冒して私を搜索に出た私の從弟の剛ィのを賞讃さるゝことでありましやう閑話休題今しも私の恐怖は殘る方なく消失せ只人目に罹るを恐るゝばかりとなりまして私は駈出して寺院の方へ飛んで行きましたが今度は方角を取違へるともなく其處邊をマゴツクともなく一直線に說敎場へ參り壇へ昇り聖書を取ッて壇より下に飛降り一足に戸外に出ましたが餘り粟喰ッたので入口の戸は明放して閉めるとを打忘れ喘ぎ〳〵本坊へ歸り机の上に聖書を抛出しました私は自分ながら尋常ならぬ容態と思ひました併し私は家內の人々が私を迎ひに參るのを氣取りましたので赤耻を搔かずに首尾能く私の役目を果したとを滿足に思ひました。

蓮月尼

蓮月尼姓は小田垣、貞節あり。洛の東山に閑居し、和歌を巧にして世に知らる。彼女が『秋の夜のすさび』に斯く云へりき。

野に山にうかれ〳〵てかへるさを、
ねやまでおくる秋のよの月。

時事一斑

千谷判事

大審院判事千谷敏德氏那覇地方裁判所長に轉せらる。氏裁判所構成法の判事は刑法の宣告又は懲戒の處分に據るにあらずして轉官、轉所、停職免職又は減俸するを

得ず」との條文に據りて命を奉せず。司法部内に二派あり、曰く先進派、曰く、後進派。而して先進派は千谷氏を助けて、後進派たる現當途者に當り、輿論亦之に同情を表するの傾向を示せり。

淺田宗伯老没す

漢醫の泰斗として何人も知らざるものなき淺田宗伯老は、八十の高齡を以て去る十六日に沒せられたり。

寄席

女儀太夫の登壇する所、寄席書生滿つ。

春光矢の如し

梅花落ち盡きて桃花紅なり。彼岸櫻亦遠からずして其芳唇を開くなるべし。春光矢の如く、三日見ぬ間の櫻を歌ふべき日を貽らんとす。

むらさきのめもはる／＼といつる日に　眞淵
かすみ色こきむさし野の原。

社會最近の顯象 其二

社會的出來事

帝國議會開設以前には人皆國會／＼と叫びて、國會は何事にかても大願成就の場所の如くに思惟し、社會は只管國會を目途に事に從ひ、國中到る處に集會の催されざるなく、演説討議の練習として或は社會的運動の機關として青年會婦人會のあらざる所なきに至りき。」斯る有樣なれば社會は自ら有爲希望的にして、廣き中には固より腐敗汚濁の水を湛さるに非るながらも、多少健全の大氣を呼吸しつゝありたるは蓋し事實なりしなり。著作雜誌新聞の增加が之を證せしのみならず、集會の頻りに催されたるが之を證せしのみならず、來れよ起きよの文字の濫用せられたるが之を證せしのみならず、改良進歩の語が限りなく繰り返されたるが之を證せしのみならず、青春妙齡の人の飛揚跋扈したりしが之を證せしのみならず、矯風禁酒の説盛に世に唱

へられ、廢娼論一時を風靡したりし如き、實に之が確證なりき。

然るに國會已に開けて過大なる希望が想像の天に畫けるブロツケン山頭の怪物なりしに氣付きし爲め、社會はにはかに反厭の心を生じ、一時懷舊の時代となれり。加ふるに議員撰擧に烈しき競爭をなしたりし結果は、頗る地方淳厚雍和の俗を傷け、又放縱の風を生じ、曾て矯風禁酒説の盛なりしに反動して社會的制裁の弛みたることも少なからざるなり。

さはいへ、逝く水と社會の潮とは一日も停止し得べきものにあらざるを以て、彼は常に變化を求めて已まず、曩に表面的事業の希望に好果を獲ざりしに懲りて、人心何時となく裡面的の事業に希望を置くこと、なり、今は國民資格の養成に注意し、先づ大國民の意氣を吹皷せんと欲して、昨年に於ける冒險事業の奬勵となり、騎馬中佐歌はれ、短艇大尉喝采せられ、「世界に於ける日本人」の如き著作亦世に出るに至りき。

加之、社會の眼は更に其地盤たる家庭に向ひ、一方には多年腐敗したりし貴族家庭の警戒を惹起し、相馬事件島原事件の如き、太く社會の視點を集めり。

勢窮て變ずるは世のならひとして、社會は再び星亨問題官紀振肅問題に向ひ、其制裁力を宣揚したりき。」

去れば社會の暗流は、已に再び淸らかなる潮を盈たしつゝあるなり。社會は已に根底的、地盤的の改革に向て意を注ぎつゝあるなり。今年に至りて、各新聞紙頻りに家庭的記事を載せ婦人傳等を掲ぐる如き、或は兩陛下の銀婚式が最も盛に且つ靜肅に祝せられたる如きは、實に其著しき顯象なりと謂はざるを得ず。

遲日熙々たるの春期すべからざらんや。新花灼々たるの日待つべからざらんや。たとへ一方には猶春寒夜陰の料峭を免れざるあるにもせよ、未た遽に失望すべき社會にあらざるなり。

學事

明治十七八年頃の洋學流行したる結果は廿年廿一二年頃の新文學繁昌の時節となり、過大なる中央集權的教育法は之が反動の波に乘じて、國家的教育の名を以て、所謂文部宗の御用教育を弘め、固陋なる教義の布教を勉むるに至り、勅語を假りて道德倫理を人爲法中に規定せんとし、勅語を書したる紙前に於て禮拜の式を行はざるものは不敬者と呼ばれ、祭天の古俗を研究するものは其職を奪はれたりき。

是に於て民間の士は倔起して、其專横を咎め、身を挺して曲學阿世の徒と罵り、以て文部宗の猛威に反抗したり。

偶井上梧陰氏文部の廳の長官たるに及び、漸くその文部宗なるもの丶厭ふべきと知り、内部よりして之が改革を試みんと欲し、其根據なる文部省帝國大學高等學校等に向て先づ其手を着け、遂に意を國民的教育に留めて、實用普及主義を弘擴せんとし、細心なる改良は次第に其緒に就くに近づけり。

然れども彼は之が爲に所謂文部宗殘黨の反抗に出逢ひき。曩に相擠排したりし辻新次伊澤修二の二氏は、忽ちに其率ゆる所の大日本教育會及び國家教育會を以て相合縱し、以て文部の新政を攻擊し、百方其宿弊を維持せんとなせり。

既にして講和成りて、大日本教育會の如きは却て新文部の機關となるに至りぬ。

學政已に此くの如し。故に文學的顯象も自ら之に伴ふものありて、新小說流行の時代過ぎ、歷史傳記の回顧的文學繁昌し、今は新學政の設計と共に材料聚集勢力貯蓄に餘念なきもの丶如し。中に氣早なる人々が、或は演劇の繁昌を計らんとし、或は哲學の流行を來さんとし、以て修養時代の寂寥を慰せんとあせるに係らず、猶はか〳〵しき顯象のありとは覺えざるなり。

明治廿五年九月十四日遞信省認可